福音メッセージ集

# みことばは食べるもの

重田定義



# みことばは
# 食べるもの

重田定義

# 序にかえて

このたび、五年前に出版いたしました、わかりやすい福音メッセージ集『みことばは食べるもの』について、出版社との契約が終了しましたので、よりわかりやすく、読みやすく、より求めやすい価格で、多くの方に読んでいただきたいという思いが与えられ、祈りつつ文章を吟味し直したものを改めて発行いたしました。

申すまでもなく私はひとりの平信徒に過ぎず、聖書の知識にも乏しく、まったく未熟な者であります。なぜこのような者が福音メッセージ集を出版することになったか、その理由についてかんたんに述べさせていただきたいと思います。

私は学生時代から、神は聖書の神であり、イエス・キリストは神の御子であると信じてはいました。しかし、それは信仰と言えるようなものではなく、たんに知識として知っていたのと同程度のものでしかありませんでした。したがって教会に通ってはいても、罪の自覚も悔い改めもなく、イエス・キリストの十字架の贖いのみわざや復活のみわざも、私

自身に罪の赦しと、永遠のいのちを与えてくださる神の恵みとして受け止めることはなかったのです。

しかし、そのような罪深い者をも主は愛と忍耐をもって、見捨てず、見放さずにあわれんでくださり、十七年前に大きな試練を与えて私の自我を砕いてくださり、主の前に心からへりくだって、悔い改める機会をお与えくださり、それまでまったく眠っていた私の霊の目と耳を開いてくださったのです。それによって私ははじめてイエス様の十字架と復活のみわざを自分自身のものとして、心からの感謝をもって受け入れることができるようになりました。このときが私とイエス様の出会いのとき、霊的新生のときでありました。

霊が生まれ変わり、目覚めさせられた私にとって、聖書のみことばは、神様ならびにイエス様が私の霊に直接呼びかけて、慰め、励まし、教え、諭してくださる糧となりました。そして聖書には私たち一人ひとりに対する神様のあふれるばかりの愛のメッセージが語られているということを、まだイエス様に出会っておられない方々にお伝えすることが、主のあわれみをいただいた者としての私に与えられた務めであると示されました。十六年前から我が家で始まった家庭集会も、その動機は神様が聖書をとおして私自身に語ってくださったみことばの恵みを、ほかの方々にもお分けしたいという思いが与えられたからでした。

ここに収められた十篇の福音メッセージは、家庭集会や、各地のキリスト集会で行なった福音メッセージの中から選んだものです。お読みになって聖書の同じ箇所が何度か出てきたり、同じような説明が何度かくり返されていることにお気づきになると思いますが、このような箇所は神様が私たちに語ってくださっている重要なメッセージですから、どうかそのことに心を留めていただきたいと思います。そしてお読みになったお一人おひとりが、この本をとおして神様の愛と恵みの結晶であるイエス・キリストの救いのみわざをご自分のものとしてお受け入れになり、主に従うまことの平安と喜びと希望に満ちた人生を歩んでいただきたいと、切にお祈りいたします。

主が旧版を用いて数多くの方々にご自身のみこころを示してくださったように、このたびの版もさらに主が用いてくださり、この本をとおして主のご栄光のみがますますほめたたえられますように心から祈りつつ、序にかえさせていただきます。

最後に、主にあって表紙のデザイン制作の労をとってくださったテキスタイル・デザイナー藤村倫子姉に心から感謝いたします。また、この本について終始祈ってくれた妻都代子に感謝します。

二〇〇〇年四月

重田定義

# 目次


序にかえて……3

一　聖書はすべて神のみことば……7
二　みことばは食べるもの……22
三　わたしが造ったたましい……36
四　正しい信仰に生きるために……54
五　永遠の安全保障……67
六　「真理とは何ですか」……84
七　主との交わり……99
八　主イエスからの心離れ……114
九　信仰による決断……128
十　主イエスを信じる者の幸せ……144

# 一　聖書はすべて神のみことば

聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。

（ペテロの手紙第二1章20～21節）

## 聖書は初めから終わりまですべて神のことば

今日は冒頭の聖書の箇所から、聖書は神様のことばである、ということをごいっしょに考えてみたいと思います。

今、聖書は神様のことばであると申しましたが、それは聖書の中に神様のことばが含まれているという意味ではありません。もしそうならば、聖書のすべてが神様のことばではなくて、聖書の中に部分的に神様のことばがはいっているということになります。そして

聖書をそのように考えている人がたいへんに多く、牧師や神学者の中にもそのように考えている人が少なくないのです。

しかし、それが誤りであるということを冒頭のみことばははっきり示しています。聖書は初めから終わりまで、すなわち、創世記の一章一節からヨハネの黙示録の二十二章二十一節までの、一言一句すべてが神様のことばです。これが聖書です。では、どうしてそのようなことが信じられるのでしょうか。

## 御霊の導きによって信じる

私たち人間のからだは、生きているかぎり外から刺激を与えれば必ず何らかの反応を示します。それを生体反応と言い、生きている証拠と判断します。しかし死ねばどんな刺激を与えても反応しません。人間の霊についても同じことが言えます。もし霊が死んでいれば霊的な刺激を与えても、それに反応しないのです。聖書では罪人の霊は死んでいると言っています。そのことをパウロはエペソ人への手紙の中で、

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者……

（エペソ人への手紙2章1節）

と書いています。これはとうぜん肉体的には生きている人に語られているのですから、からだの死を言っているのではなく、霊の死を指しているのです。しかし、たとえ罪のために死んだ霊を持っていても、その霊は神の御子イエス・キリストを信じる信仰によって生き返ることができるのです。先ほどのエペソ人への手紙の中で、続けてパウロは、

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、……

（エペソ人への手紙2章4～5節）

と書いていますが、「私たちをキリストとともに生かし」とあるのは、私たちの霊を生かすということです。私たちがイエス様の救いのみわざ、すなわちイエス様の十字架の死と復活は、自分を永遠の滅びの死に至る恐ろしい罪から救い出し、永遠のいのちを与えてくださるためであったと、ただすなおに信じた瞬間に、あわれみ豊かな神様はイエス様が私たちに代わって支払ってくださったこの尊い犠牲のみわざに免じて私たちの罪を赦し、死んでいた霊を生き返らせてくださるのです。

こうしてイエス様を信じることによって神様の霊を受け、霊的に生き返った者は、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵

みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

（コリント人への手紙第一　2章12～14節）

とパウロが言っているとおり、御霊のことをわきまえるようになります。聖書のみことばは、まさに神様の御霊に属することでありますから、この御霊の導きによって、はじめて生き返った私たちの霊が聖書のみことばを、そのまま神様のみことばとして受け取ることができるようになるのです。

## 預言者たちの証言によって信じる

聖書に、

神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろ

いろな方法で語られました……

（ヘブル人への手紙1章1節）

とありますように、神様は昔は預言者たちの口をとおして、ご自身のみこころを示しておられました。その例をいくつか挙げてみましょう。

王であり、かつ預言者であったダビデは次のように言っています。

主の霊は、私を通して語り、そのことばは、私の舌の上にある。

（サムエル記第二23章2節）

ダビデは自分の語ることばが神様ご自身の霊によるものであることを、このように言い表しています。

また預言者エレミヤは、

次のような主のことばが私にあった。「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなた

に命じるすべての事を語れ。彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。――主の御告げ。――」

（エレミヤ書1章4～8節）

と言っています。エレミヤはこの神様のみことばに勇気を得て、神様に命じられたみことばをすべて命じられたままに伝えたのです。

また預言者エゼキエルは次のように言っています。

その方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたの前にあるものを食べよ。この巻き物を食べ、行って、イスラエルの家に告げよ。」そこで、私が口をあけると、その方は私にその巻き物を食べさせ、そして仰せられた。「人の子よ。わたしがあなたに与えるこの巻き物で腹ごしらえをし、あなたの腹を満たせ。」そこで、私はそれを食べた。すると、それは私の口の中で蜜のように甘かった。その方はまた、私に仰せられた。「人の子よ。さあ、イスラエルの家に行き、わたしのことばのとおりに彼らに語れ。」

（エゼキエル書3章1～4節）

巻き物とは聖書のことです。エゼキエルは神様の仰せに従って聖書のみことばを食べて

霊の腹を満たしました。みことばを霊で味わった彼は「みことばは蜜のように甘かった」と告白しています。彼の霊は蜜のように甘いみことばによって元気になり、神様から告げられたすべてのみことばを、そのままイスラエルの人々に伝えました。私たちの生き返った霊はこれら預言者たちの証言によっても、聖書がすべて神のことばであることを確信するのです。

## イエス・キリストの宣言によって信じる

イエス様はご自身で聖書に何が書かれているかを語っておられます。

それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみな

の目がイエスに注がれた。イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。

（ルカの福音書4章16～22節）

イエス様が朗読されたイザヤ書のこの箇所は、神様がやがて神の御子をこの世に遣わして、滅びの死に至る恐ろしい罪に束縛されて苦しんでいる人々を救済するという、神様の救いの約束が語られているところですが、イエス様は神様のこの救いの約束は今、自分によって実現したと自ら宣言なさっているのです。霊的に生き返った者は、人となってこの世においでになった神の御子イエス様ご自身の宣言によって、聖書はすべて神のことばであることを確信するのです。

## 聖書の預言の成就によって信じる

聖書の最も大きな預言が成就された事実は、先ほどイエス様が自ら宣言されたように、二千年前にこの世に来られた御子イエス様が、神様の人間救済のご計画を十字架と復活のみわざによって成就されたということであります。驚くべきことに、聖書はある歴史的な

事実が起こるはるか前に、そのことが起こると預言しています。ということは預言そのものが歴史になるということです。これは聖書に語られている預言が神様のことばであるという証拠でなくて何でしょうか。聖書の預言が成就したという例は、先ほど挙げました神が人となられた救い主イエス様を頂点として、ほかにも多くありますが、その良い例にユダヤ民族の離散と集合があります。

ユダヤ民族の離散について聖書は次のように預言しています。

主は、地の果てから果てまでのすべての国々の民の中に、あなたを散らす。あなたはその所で、あなたも、あなたの先祖たちも知らなかった木や石のほかの神々に仕える。これら異邦の民の中にあって、あなたは休息することもできず、足の裏を休めることもできない。

（申命記28章64～65節）

この預言のとおり、神様に選ばれた民でありながら、神様に不従順の罪を犯し続けたユダヤの民は、紀元七十年にローマ皇帝ティトゥスによって預言どおりエルサレムが完全に滅ぼされてから世界中に散らされました。それだけではありません。今日も彼らは聖書の預言どおり世界中の民族に嫌われ、迫害されているのです。

主があなたを追い入れるすべての国々の民の中で、あなたは恐怖となり、物笑いの種となり、なぶりものとなろう。

（申命記28章37節）

世界の歴史の中でユダヤ民族が尊敬された時代は見当たらないといってよいでしょう。むしろどこの国に行っても迫害されるのです。ユダヤ民族の歴史は迫害の歴史と言ってもよいでしょう。どうしてなのか私たちには理解できません。しかし聖書のみことばから私たちは生き返った霊で、このような事実は彼らが神様の選びの民であるにもかかわらず、神様からくり返し、くり返し警告されても耳を傾けず、神様に逆らって偶像を崇め、礼拝し、自分勝手な道を歩んで来たことに対する神様のさばきの結果であると知ることができます。そして今日でもユダヤ民族が世界中から事あるごとに疎（うと）まれているのは、この預言が成就しているからなのです。

またユダヤ民族の集合については、神様は預言者エゼキエルによって次のように預言しておられます。

わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住む

すべての所で彼らを養う。

（エゼキエル書34章13節）

この預言のとおり、世界中に散らされていたユダヤ人たちは集められ、一九四七年にイスラエルの国は独立国として再建されたのです。人類の歴史上、一度国を滅ぼされた民族が二千年を経た後に国を再建した例はいまだかつて無く、まさに神様がなさった奇蹟としか言いようがありません。イスラエル国の再建はユダヤ人自身の力によるものではなく、ただ主なる神様のみことばに基づくものであったことがよくわかります。

## 自分自身の信仰の体験をとおして確信する

聖書がすべて神様のみことばならば、聖書の中で神様、イエス様を信じる者に約束されたことは、信じる者の霊にその約束がわかるような形で示されるはずです。そして事実、信じる者はそれぞれ自分自身の体験をとおして聖書にある神様のみことばの約束が自分の身の上に成就されたという多くの証拠を挙げることができるのです。たとえばイエス様は、

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイの福音書11章28節）

と約束なさっています。そしてこのイエス様のおっしゃった約束を信じた結果、約束どおりイエス様に自分の重荷を担っていただいて重荷から解放され、ほんとうに楽になったという体験をお持ちになった方々も多いのです。また、

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネの福音書14章27節）

というイエス様のみことばに信頼した結果、自分の上におおいかぶさって来るいろいろな恐れや思い煩いから解放されて、現実の問題は何も解決されていないのにもかかわらず、イエス様が与えてくださったこの世の平安とはまったく違う平安に心が満たされたという体験をお持ちになった方々も多いのではないでしょうか。

また聖書に約束されている、

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒の働き16章31節）

というみことばを確信して祈った結果、このみことばどおりに自分だけではなく、家族も霊の目を開かれてイエス様を救い主と信じることができたという体験をお持ちの方々も多いと思います。このように私たちの生き返った霊は自分自身の信仰の体験をとおして、ほんとうに聖書が神様のことばそのものであることを確信するのです。

## 神のみことばである聖書に手を加えてはならない

聖書がすべて神様のことばであることは、これまで述べて来たさまざまなことをとおして私たちの生き返った霊が確信します。ですから聖書に語られていることを人間の知恵で考えたり、神学者の説に解決を求めてもわかるはずがないのはとうぜんです。とくに科学に基礎を置いている現代神学では、聖霊によるのではなく科学的理論を物差しにして聖書を解釈しようとするので、神様のなさった奇蹟やイエス様の奇蹟はすべて否定されます。たとえば天地創造も、処女懐妊も、復活も科学的にはあり得ないからと否定します。しかし科学は本来神様が創造された被造物とその仕組みを調べることによって、いかに神様のみわざが偉大なものであるかを知って、神様を恐れ、神様を賛美するために人間に与えられたものです。その科学を神様のみわざの真偽を測るために使うのは、まったく見当違い

であるばかりか、神様を恐れぬ傲慢（ごうまん）な態度と言うべきでしょう。最近の英国ＢＢＣ放送の調査によると、英国の聖職者の八割は天地創造を否定し、また四分の一はイエス様の処女降誕を否定し、いっぽう大部分の聖職者は復活は信じているという矛盾した結果を報告していますが、これこそ聖職者が霊によって聖書がすべて神のことばであることを信じないで、人間の知恵で聖書を解釈した結果生じた混乱と言えるのではないでしょうか。

聖書には復活のイエス様に会った多くの弟子たちの証言が載っています。弟子たちは復活のイエス様に出会ったことを証ししたために迫害され、殺されてもそれが事実であることを証し続けました。イエス様を信じて生き返った霊は、科学ではなく、人間の知恵でもなく、いのちをかけた彼らの証言によってイエス様の復活を事実として確信することができるのです。

聖書が神のことばである以上、人間が勝手にこれに手を加えて、つけ足したり、削除したりすることは決して許されません。聖書のいちばん最後にあるヨハネの黙示録に、神様はヨハネの口を用いて次のように厳しく戒めておられます。

私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。また、こ

の預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。

（ヨハネの黙示録22章18～19節）

神様のこの警告を厳粛（げんしゅく）に受け止めて、聖書を批判的な思いで読むのではなく、また自分で勝手な解釈を加えて読むのではなく、神様の前に謙虚な気持でへりくだって「神様のみことばを私にください」という心で聖書に向かえば、神様はどなたにでも惜しむことなく霊の目を開いて聖書のみことばをとおしてご自身のみこころを示してくださり、私たちの霊にあふれるような永遠のいのちの喜びと、慰めと、励ましと、平安、そしてまことの希望を与えてくださいます。

# 二　みことばは食べるもの

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

（エレミヤ書15章16節）

## みことばを見つけ出し、それを食べた

今日は聖書のこの箇所から、みことばを食べるということについて、ごいっしょに考えたいと思います。ここで言っている「みことば」とは、神様のことば、あるいは聖書のことばのことです。私たちの常識では、言葉は耳で聞くものです。また、食べるというのは食べ物を食べることです。ですからこの箇所を読まれる方の中には「みことばを食べる」という表現に、たいへん奇異な感じをお持ちになる方もおられるのではないでしょうか。

しかし、神のみことばは耳で聞くものでもなければ、目で読むものでもなく、まさに食

べるべきものである、ということが今日の主題であります。

「私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました」といっているエレミヤは、神様に忠実に従った旧約時代の偉大な預言者のひとりです。歴史の話になりますが、エレミヤは紀元前六百年の前半、イスラエルの南半分にあったユダ王国のヨシヤ王の時代に生きた人でありました。このエレミヤは神様から預言者として召し出されました。預言者とは神様からメッセージを受け、それを人々に告げ知らせる者のことです。そのときの様子をエレミヤは次のように語っています。

次のような主のことばが私にあった。「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。」

（エレミヤ書1章4～8節）

このようにエレミヤは決して自ら進んで預言者になったのではありませんでした。神様からお召しを受けたとき、自分にはとてもできませんと尻込みしました。けれども神様はそのように気の小さいエレミヤを、生まれる前から預言者にすると決めておられたのです。神様の選びとはそのようなものであり、私たち人間の選びの基準とはまったく違うのです。

神様はエレミヤに何を語れとお命じになったのでしょうか。イスラエルの歴史を見ますと、イスラエル民族は神の民として選ばれたのにもかかわらず、神様の仰せに従って歩んだことはほとんどありません。エレミヤの時代にも神様に背いていました。そのイスラエルに対して、神様はエレミヤの口をとおして「悔い改めてわたしに立ち返れ。さもないとわざわいを受けることになる」と警告を与えられたのです。しかし、エレミヤの警告に対して彼らは悔い改めるどころか、かえって反発しました。

彼らは主を否んでこう言った。「主が何だ。わざわいは私たちを襲わない。剣もききんも、私たちは、見はしない。預言者たちは風になり、みことばは彼らのうちにない。彼らはこのようになる。」

（エレミヤ書5章12～13節）

イスラエルの民の傲慢な態度に怒られた神様は、さらにエレミヤに次のように言えと命じられました。

万軍の神、主は、こう仰せられる。「あなたがたが、このようなことを言ったので、見よ、わたしは、あなたの口にあるわたしのことばを火とし、この民をたきぎとする。火は彼らを焼き尽くす。イスラエルの家よ。見よ。わたしはあなたがたを攻めに、遠くの地から一つの国民を連れて来る。――主の御告げ。――それは古くからある国、昔からある国、そのことばをあなたは知らず、何を話しているのか聞き取れない国。その矢筒は開いた墓のようだ。彼らはみな勇士。彼らはあなたの刈り入れたものとあなたのパンを食らい、あなたの息子、娘を食らい、あなたの羊の群れと牛の群れを食らい、あなたのぶどうと、いちじくを食らい、あなたの拠り頼む城壁のある町々を、剣で打ち破る。

（エレミヤ書5章14～17節）

神様の予告どおりに、やがてバビロニヤの王ネブカデネザルはイスラエルを攻略し、エホヤキン王を初め貴族、兵士、職人などの多くが捕らえられて都バビロンに連れて行かれることになるのです。これが歴史に有名なバビロンの捕囚です。

エレミヤは預言者として神様から命じられたことをそのまま率直に伝えました。しかしエレミヤの言ったことはイスラエル人にとって不愉快なこと、耳の痛いこと、腹の立つことばかりでした。そのため彼らはエレミヤを捕らえ、足枷(あしかせ)をつけて城門につないだり、地下牢にいれたり、深い穴に投げ込んで泥の中に沈ませたりというような、ひどい目に会わせました。そこで彼は、

なぜ、私は労苦と苦悩に会うために胎を出たのか。私の一生は恥のうちに終わるのか。

（エレミヤ書20章18節）

と嘆き悲しみ、「もう、主のことばを語ることはしない」と決心するのですが、果たしてそのようにできたでしょうか。

私は、「主のみことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい。」と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。

（エレミヤ書20章9節）

と告白しているように、彼は自分の意志に反して神様のみことばを宣べ伝え続けたので

す。どうしてでしょうか。それは彼が神様のみことばを食べたからなのです。神様のみことばを食べることによって、彼の霊が燃え、強められたからなのです。すなわち彼のエネルギーの原動力は食べたみことばだったのです。

## みことばは霊の口を開けなければ食べることはできない

先ほども申しましたように、私たちが日常食べるのは肉や野菜、米などの食品です。私たちの肉体を養うこれらの食品は、肉体の口を開けなければ食べられません。では、みことばはどうでしょう。みことばは霊の糧ですから、霊の口を開けなければ食べることができないのです。

また、私たち人間はお互いに相手のことばを頭で理解することによって、相手が何を考え、何をしたいのかがわかります。しかし、神様のみことばは頭で理解しようとしてもわかりません。人間の知恵でみことばを味わおうとしてもだめなのです。長いこと教会に通って、聖書を読んでいる人でも、これを道徳の書として読んだり、歴史の書として読んだり、あるいはキリスト教神学を研究するために読んだりするかぎり、それは聖書を頭で食べているのです。いくら人間の知恵で聖書を味わおうとしても、聖書の味はまったくわ

からないのです。なぜでしょうか。それはみことばは私たちの頭にではなく、霊に与えられるものであるからです。そして霊に与えられたものは霊の口を開けて食べなければならないのです。では霊の口を開けるとはどういうことなのでしょうか。それは神様の前にへりくだって、すなおになって神様に向けて心を開くという姿勢を取るということです。エレミヤが神様のみことばを食べることができたのは、彼がそのような態度を取ったからにほかなりません。

## みことばは永遠のいのちに至る食べ物

神様のみことばは食べればなくなってしまうような食べ物、限りある生命を維持するだけの食べ物と異なり、不滅の、無限の食物であり、永遠のいのちのためになくてはならない食物です。私たちは限りある生命を支える糧を得るために毎日働きますが、イエス様は肉体の糧よりも霊の糧のほうがはるかに大切であると次のようにおっしゃっています。

なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。

（ヨハネの福音書6章27節）

イエス様は永遠のいのちに至る霊の食物は「人の子」、すなわち神様のひとり子の神、人の子としてこの世に来てくださったイエス様が与えるとおっしゃっています。ではイエス様はどのようにして永遠のいのちに至る食物を私たちに与えてくださるのでしょうか。その答えはイエス様の次のみことばにあります。

わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。

（ヨハネの福音書6章48～51節）

このように、イエス様ご自身がいのちのパンとなって、ご自身を私たちに提供してくださったのです。もちろん、これはイエス様を食べるということではありません。いのちのパンを食べるとは、私たちに永遠のいのちを与えてくださるために、私たちの身代わりに死んで、よみがえってくださったイエス様を心から自分の救い主と信じ、受け入れることなのです。そしてイエス様を信じた者の霊には、イエス様は助け主として聖霊を与えてくださいます。このことはイエス様の次のような約束に基づいています。

わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。

（ヨハネの福音書14章16～17節）

助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

（ヨハネの福音書14章26節）

またパウロも、イエス様を信じた者に御霊が与えられるのは何のためであるかを次のように言っています。

神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。ところで私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって、神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。

（コリント人への手紙第一 2章11～13節）

まことに聖書のみことばは、御霊に導かれ、御霊の助けによってはじめてその深い味を味わい知ることができるのです。

## みことばを食べた者の上に起こる変化

では私たちがみことばを食べて、その味を知ると、どのようなことが起こるのでしょうか。まず霊が強められ、元気になり、また喜ぶようになります。一つの例をご紹介します。

癌で天に召された主にある兄弟がおられました。その兄弟が入院されている病室にときどきお見舞いに伺いましたが、そのときにいつもその兄弟が言われた言葉は「今日はどんなみことばがいただけますか」というものでした。すでに癌の末期であることをご存じであった兄弟は、その都度「自分はもう何も食べられないけれども、みことばは食べられます。ほんとうに御馳走です」と言っておられました。そしてこの兄弟は、みことばに支えられて安らかに天国に召されたのです。

このように、私たちが自分の身のまわりの困難な、希望のない状況は変わらなくても、みことばを食べると、霊が強められて元気になり、喜ぶことができるのです。パウロは、

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。

（コリント人への手紙第二6章10節）

と言っていますが、これを頭で読めばだれでも何のことか、ぜんぜん理解できないでしょう。こんな矛盾したことは常識ではとうてい考えられないからです。もし、だれかが「自分は悲しんでいるようでも喜んでいる」とか、「何も持っていないようでも、すべてのものを持っている」と言ったとすれば、冗談か、気が狂ったと思われるでしょう。しかし、みことばを食べた人は、「ほんとうにそのとおりです。しかり、アーメン」と、このみことばを心から受け入れることができるのです。これが聖書のみことばを食べるということであります。

## みことばの飢饉のときが来る

さて、聖書のアモス書には、みことばの飢饉（ききん）を送るという神様の警告が記されています。

見よ。その日が来る。――神である主の御告げ。――その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渇くのでもない。実に、主のことば

を聞くことのききんである。

（アモス書8章11節）

みことばを聞くことの飢饉（ききん）とは、神様のみことばを必死になって求めても、聞こうとしても、もう手遅れだということです。その日が来るのはいつでしょうか。それは神様のさばきの日です。神様はご自分が遣わされたイエス様による救いを拒み続けた者をさばくために、イエス様をふたたびこの世に遣わすと、みことばをもって警告しておられます。さばきの日までは、愛とあわれみに富みたもう神様は、ひとりでも多くの人を滅びから救おうと忍耐をもってみことばを送り続けてくださいますから、今はまだ、みことばを十分に味わうことのできる恵まれたときであります。しかし神様はいつまでも忍耐してはくださいません。聖書に、

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろな

わざは焼き尽くされます。

（ペテロの手紙第二3章9～10節）

とあるように、さばきの日は突然やって来ます。ですから、そのときまでにイエス様の十字架による救いを受け入れていなければ、いかにみことばを聞きたくても、食べたくてももう遅いのです。

## みことばの飢饉の日が来る前にキリストを信じる

私たちが静まって自分の心の中をのぞいて見るときに、食物にかぎらず、この世のいかなるものをもってしても、決してそのようなもので心の不安や空しさを根本的に除くことはできないことがわかるはずです。この世のどんなものでも、私たちの心にぽっかり開いた穴を満たすことは決してできません。

ただ一つ、こころの空しさを満たし、満足を与えることのできるものは、みことばです。なぜなら、私たちはみことばをとおしてイエス様のかぎりない愛に触れ、みことばによって約束された永遠のいのちに、また生きる喜びに満たされるからです。

どうか、まだ聖書のみことばを頭で読んで理解しようとしておられる方は、みことばの

飢饉（ききん）のときが来る前に、神様の前にへりくだって、いのちのパンであるイエス様を心に受け入れてください。神様は喜んであなたに御霊を送ってくださり、たちどころにあなたの霊の目を開いてくださり、みことばのすばらしい味を味わうようにしてくださいます。

最後に次のみことばを味わって終わりたいと思います。

あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。私には、あなたの戒めがあるので、わきまえがあります。それゆえ、私は偽りの道をことごとく憎みます。あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

（詩篇119篇103～105節）

# 三　わたしが造ったたましい

いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖ととなえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰え果てるから。」

（イザヤ書57章15～16節）

今日もごいっしょに、聖書のみことばを味わいたいと思います。とくに、このみことばの中にある「わたしが造ったたましい」と神様が仰せになった、たましい、あるいは霊のことを、これからしばらくの間考えたいと思います。

大昔から人間はたましい、霊の問題はたいへんに大切なものであると考えておりました。そして霊魂というものが私たち人間に宿っており、人間にとって何か大切な役割をす

るものらしいということを漠然と信じていたようです。けれども霊魂は目に見えるものでないだけに、それがどこから来たのか、どのような働きをするものなのか、私たち人間のからだとの関係はどうなっているのか、あるいは死んだら霊魂はどうなるのか、などなどいろいろと考えてはみるが、どうもわかりません。

人間の考えた宗教というものが生まれた理由も、そこにあったのではないかと思います。ですから、いわゆる宗教の中心課題は、これらの問題を人々にどう説明して、安心させるかということであったといえましょう。

## たましい、霊についての日本人の考え

では、日本人は昔から霊、たましいの問題について、どのような考え方をしていたのでしょうか。これについて、民俗学者の柳田国男さんの著書『先祖の話し』の中に、興味深いことが書いてありましたので、霊魂の問題に関するところだけを、ごくかんたんに紹介いたしますと、「日本人はずっと昔から、人が死んだらどこに葬っていたかというと、野辺送りという言葉が象徴するように、近くの山に葬っていた。だから日本人は近くの山に死んだ人の霊がいる、遠くにいるのではない、と思っている。そして、このように先祖の

霊が近くにいるから、時々自分の家に迎えてもてなす、という習慣ができたのであって、この習慣は仏教が日本にはいって来る前からあった。仏教では死人は極楽浄土に行くと教えるが、日本人には死人の行く先について昔からこのような信仰があるから、仏教を信じるようになっても、死人の行き先についての仏教の教えは心から信じられない。なぜなら極楽浄土というところは、西の方十万億土の彼方にあり、そのような遠いところに自分の先祖や親、兄弟が行ってしまったら、二度と帰れないと思うからだ」とありました。

元来、仏教には祖先の霊魂をもてなすという考え方はなかったのですが、日本に入ってきてから後、霊魂についてのこのような日本古来の習慣をうまく取り入れたのが、お彼岸やお盆の行事です。また日本の仏教では、亡くなった人のために何回も法要という行事を行ないます。最初は初七日法要、次いで四十九日法要、百カ日忌、一周忌、三回忌と続き、ある年限、たとえば三十三年目、あるいは五十年目で打ち切ります。なぜこのようにくり返して法要を営むのか、またなぜある年数で打ち切るのかというと、法要とは遺族が死者の霊を清める行事であり、くり返して法要を行なうのは、死者の霊は、はじめはまだ一人ひとり個性を持っていて汚れているけれども、遺族が法要を重ねる度にだんだんと清くなるからで、追善供養という言葉はそのような意味を持っているのだそうです。また三十三

年あるいは五十年で法要を打ち切るのは、そのくらい法要の回数を重ねれば、汚れた霊も清くなり、個性も失われてきて、先祖の霊と一つに融合してしまうからなのだそうです。

人間の頭で考えつくこと、あるいは人間の作った宗教が考えることは、このようにたいへんご都合主義的な、自分勝手な解釈なのであります。私たちはこのような説明を聞いて果たして納得できるでしょうか。たましい、霊について真剣に考え、また悩んでいる人にとって、このような説明はとうてい承知できないでしょう。

## 霊についての創造主なる神の答え

では、人間の知恵や宗教の考えではなく、聖書の神様は霊について私たちの疑問にどう答えてくださるでしょうか。

聖書の神様とは、人間が作って祭り上げた偶像の神々や仏ではなく、人間を含めて天地万物を創造され、支配され、永遠に存在しておられる、生ける神様であります。その神様が人間の霊はどこから来たのか、どのような働きをするものなのか、からだの中ではどういう状態にあるのか、人間が死んだら霊はどうなるのかなどの、人間にとっての大問題に

ついて聖書のみことばによって明快に答えておられるのです。

まず、冒頭のみことばにあるように、霊は神から出て人の中に置いたものだと神様は仰せになっています。創世記に神様が人間をどのようにお造りになったかが記されています。

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。
そこで、人は、生きものとなった。

（創世記2章7節）

このように、神様はまず人間のからだを土地の土、すなわち有機、無機の物質でお造りになり、その後でご自分のいのちの息をからだの中に吹き込まれたのです。この神のいのちの息がすなわち霊であり、「そこで、人は、生きものとなった」とあるように、霊がからだに入ったときに、はじめて人間は神様に応答することができる生きものとなったのです。神様が人間を他の動物と違うようにお造りになったのはこの点です。動物は神様と応答できる霊を持っていません。ですから彼らは本能だけで生きているのです。しかし、人間は神様に応答すべきものとして造られ、神様を愛し、神様と交わり、神様の仰せに従うようにと霊を与えられたのです。人間が生きる意味、いのちを与えられた意味はここにあります。

## 霊の働きは何か

次に、いったいその霊の働きは何かということについて、もう少しくわしく考えてみましょう。家族も財産も健康もすべて失うというたいへんな苦しみに会いながら、真剣に神様と応答した結果、霊の目が開かれて「私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました」と告白することができた旧約時代の信仰の人ヨブは次のように言っています。

人の中には確かに霊がある。全能者の息が人に悟りを与える。

（ヨブ記32章8節）

私たちの中に神様が入れてくださった霊の働きは、神様からのメッセージを受けて、何が正しいか、何が正しくないか、何が善か、何が悪かという判断を正しく行なうことと、神様の深いみこころを示されて喜ぶことです。ヨブが言っている「悟り」とは神様に対して霊の目が開かれることであり、その結果、神様のみこころがわかるという意味であって、人が難行苦行をして、そこから悟りを得たとか、突然良い知恵がひらめいて物事の道理がわかったという、人から出たことではないのです。

では、すべての人の霊がこのように正しく働いているのだろうかというと、残念ながらそうではありません。どうしてでしょうか。それはその人に罪があるからです。神様に背を向けて自分の肉の思いに従って生きるという罪を犯しているからです。自分の思いに従って生きるのは何も悪いことではないと考える人はとても多いのです。けれどもこれこそ造り主である神様を無視した自分勝手な思いであり、わがままであり、罪なのです。聖書では、このような状態にある人をよく「死んでいる」と表現します。これは霊が閉ざされた状態、あるいは霊が死んだような状態を指しているのです。パウロが、

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者……

（エペソ人への手紙2章1節）

と言っているのは、信者の信仰以前の姿を指しており、神様を中心として生きるのではなく、何事も自分中心という罪の中に生きていて、神様から与えられた霊が汚れて死んだようになった者のことを指しているのです。

## 死後の霊の行き先

では次に私たちが死んだら、霊はどこに行くのかということについて聖書は何と言って

いるのでしょうか。行き先は次の二つのうち一つしかありません。一つは天国であり、もう一つはハデス、すなわち神を信じない者が死後に刑罰を受ける場所です。イエス様はこの世で自分だけが贅沢ざんまいに暮らしていて、神様に目を向けようともしなかった金持ちと、日々の食べ物にも事欠いたすなおなラザロのたとえをとおして、このことをはっきり教えておられます。

さて、この貧乏人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。「父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。」アブラハムは言った。「子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。それればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることも

できないのです。」

（ルカの福音書16章22～26節）

この金持ちは、金持ちだからハデスに落とされたのではなく、神様に目を向けずに、自分の欲を満たすことだけを考えて一生を過ごしたために落とされたのです。またラザロも貧しかったから天国にはいることができたのではなく、貧しさの中にあっても目を神様から離さず、神様にゆだね続けていた彼を神様がよしとされたからであります。イエス様はこのたとえで、死んだ後ではいくら悔い改めても、もはや手遅れであることを警告しておられます。

ではハデスに落とされた霊はどうなるのでしょうか。ヨハネはヨハネの黙示録の中に次のように書いています。

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。

（ヨハネの黙示録20章12節）

ここに書かれている「数々の書物」とは、一人ひとりの行ないがすべて記録されている書物のことであり、また「いのちの書」とは、イエス・キリストを受け入れて救われた者の名前が記録されている書物です。神様は完全な方、聖にして義なる方ですから、私たちは過去のことを忘れても、神様は私たちの行ないや心に思ったことまで、すべて記録しておられ、その記録に基づいて最後の審判のときに、一人ひとりに公正なさばきをなさるのです。そして、

いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。
（ヨハネの黙示録20章15節）

と書かれているように、神様の救いの御手であるイエス・キリストを拒み続けて死んだために、「いのちの書」に名前が記されないままハデスに落とされた者の霊は、その審判で神様から見放されて永遠に火の池で苦しまなければならないという、恐ろしい宣告を受けるのです。これが聖書の示す滅びであり、これこそ人間にとってもっとも恐ろしいさばきなのです。

## 罪人をあわれまれる神

しかし、この義の神は、同時にあわれみの神でもあります。神様はご自分に逆らってわがまま勝手に生きた報いとして滅びるしかない人間をあわれんで、次のように呼びかけておられるのです。

わたしは誓って言う。――神である主の御告げ。――わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。

（エゼキエル書33章11節）

これはイスラエルの民だけでなく、ご自分に背を向けているすべての人々に向かって呼びかけておられるのであります。親が子どもを慈（いつく）しむように、愛をもってお造りになった人間が、ご自分に背いたまま滅びて行くのを悲しんで、このように呼びかけてくださる神様のご愛がこのみことばをとおして心にしみる思いがします。

そして、神様のこの呼びかけに耳を傾け、自分の罪に気づいて心砕かれ、悔い改めて「お赦しください」と神様の前にへりくだり、立ち返る者のために、ご自分との和解の道を用

意してくださっていたのです。その和解の道こそ神が人となられたイエス様なのです。パウロはこれについてテモテへの手紙第一に次のように書いています。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。

（テモテへの手紙第一　2章4～6節）

しかし、私たちがこのイエス様を自分の罪の贖い主と信じることは自分の知恵によってではできません。前にも述べましたように、ただすなおになって神様の前にお赦しくださいとへりくだったときにのみ、神様が恵みによって一方的に私たちの死んでいたような霊を生き返らせてくださる、そのときに私たちははじめて信じることができるようになるのです。

## 生き返った霊は主との交わりを喜ぶ

このようにして生き返った私たちの霊は、神様や主イエス様との霊的な交わりを心から

喜ぶことができるようになります。ダビデは、

こうして私のたましいは、主にあって喜び、御救いの中にあって楽しむ……

（詩篇35篇9節）

と賛美していますが、これは生き返った霊だけが知る喜びです。

また生き返った霊は、イエス様の声とサタンの声を霊の耳で聞きわけることができるようになり、イエス様の声に従って行くことこそがもっとも安全であり、いちばんの幸せであるとはっきりわかるようになります。このことをイエス様は羊飼いと羊のたとえで次のようにおっしゃっています。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。

（ヨハネの福音書10章1～5節）

羊飼いを先頭に、羊の群れが彼の声に従ってついて行く光景が目に浮かぶようです。イエス様はその後でさらにこうおっしゃっています。

盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。

（ヨハネの福音書10章10～11節）

羊は羊飼いがいのちを捨ててまで自分たちを守ってくれることを知っていますから、彼に信頼して、彼の声だけを頼りに従順について行くのです。イエス様を信じる者もイエス様の声だけを頼りにイエス様に従います。それは、イエス様を信じる者の生き返った霊が、イエス様こそ罪の中に死んでいた自分を生かし、永遠に守り導いてくださる方であることを知っているからであります。

## 生き返った霊を宿すからだは死んだらどうなるか

では、イエス様を信じて霊は生き返ることができても、その霊を宿している肉体のほう

はいったいどうなるのでしょうか。信じていても肉体は一度死んだら生き返らないのでしょうか。もちろん、神様はこのこともちゃんと解決してくださっています。すなわち、神様はイエス様を信じる者のからだも新しくよみがえることを、イエス様の復活によって約束してくださっているのです。パウロはイエス様の復活と信じる者のからだのよみがえりとの関係について、コリント人への手紙の中に次のように書いています。

もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

（コリント人への手紙第一15章17～22節）

しかし、どのようなからだでよみがえるのでしょうか。コリントの教会の人たちも同じ

疑問を持ちました。パウロはそれに答えて次のように言っています。

死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。聖書に、「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。第一の人は地から出て、土で造られたものですが、第二の人は天から出た者です。土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ているのです。私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。

（コリント人への手紙第一15章42～49節）

「朽ちるもの」「卑しいもの」「弱いもの」「血肉のからだ」、これらはすべて第一の人、すなわち土から造られたアダムのかたちを持つ私たちの生まれながらのからだの特徴です。

いっぽう、「朽ちないもの」「栄光あるもの」「強いもの」「御霊のからだ」とは、第二の人、すなわち天から来られた復活のイエス様のからだの特徴です。そして、イエス様を信じた者は、この復活のイエス様と同じからだによみがえると約束されているのです。

では信じる者のからだが復活のイエス様のからだと同じからだによみがえる、そのときはいつでしょうか。パウロはコリントの教会の人々に答えて次のように説明しています。

終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

（コリント人への手紙第一15章52節）

「終わりのラッパ」というのは、イエス様が信じた者のからだをよみがえらせて天国に携え上げるために迎えに来てくださる合図でもあります。

前にも申しましたが、イエス様を信じて死んだ者の霊は、死の瞬間に肉体から離れて天に上げられ、イエス様のみそばで安らかに憩っています。やがて神様が定められた世の終わりの時の前に、その霊を空中までイエス様が連れて来てくださり、そこで朽ちたからだに代えて与えられる朽ちない、聖い、御霊に属するからだと一つにされます。またそのとき地上に生き残っているキリスト者のからだも、同じ朽ちないからだに変えられて、その

ままともに天国に携え上げられるのです。

## 霊の問題は生と死の問題

はじめに申しましたように、霊魂の問題はだれにとっても大いに気になる問題です。なぜでしょうか。それは生と死に関わる問題、永遠のいのちと永遠の滅びに関わる問題だからです。そしてこの問題は人間が考え出した宗教では、あるいは偶像の神を信じる信仰では何の解決もできません。いっぽう、霊を吹き込んで私たちを造ってくださった、生けるまことの神様のお考え、ご計画は、何と大きく、深く、完全でありましょうか。まことに恐れるばかりです。神様は、ご自分がお造りになった一人ひとりを、私たち自身が知っているよりもはるかによくご存じです。そしてその一人ひとりを心から愛してくださっています。ですから、ご自分から背き離れた私たちのために、尊い御子のいのちを犠牲にしてまで私たちの汚れた霊とからだを聖いものに生き返らせて、ご自分との親しい永遠の交わりを回復しようと望んでくださるのです。私たちは改めてこの神様と救い主イエス様に心から感謝したいと思います。

# 四　正しい信仰によって生きるために

「わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

（ヘブル人への手紙10章38～39節）

今日は正しい信仰という問題について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

## 信仰の定義

信仰とは何か、ある大きな辞書を調べましたら「信仰」の項目に次のように書いてありました。「信仰とは、自分にとって究極的な価値や意味を持っている対象と、全人格的な関係を持ち、その対象に無条件に依存し、献身することをいう」

少し堅苦しい言葉ですが、信仰とはまさにそういうものなのです。しかし、ここでたい

へん重要な問題は、「自分にとって究極的な価値や意味を持つ対象」を何に置くかということです。というのは、もし信仰の対象を間違えると、とんでもない、恐ろしいことになるからです。このことは先頃わが国のみならず、世界中を震駭（しんがい）させた「オウム真理教」の例を見てもわかります。彼らは正しくない、誤った対象に無条件に従い、依存し、献身した結果、あのような恐ろしい事件を起こしてしまったのです。

## 信じることと信仰とは同じではない

しかし、その前に私たちが知っておかなければならないのは、信じることと、信仰とは同じではないということです。よく、「私は神様がいることは信じているけれども、信仰はしていません」とおっしゃる方がいます。この言葉は矛盾しているようですが、まさにそのとおり、神様を信じているのと、神様を信仰しているのとは違うのです。聖書にもそういう例が書かれています。

あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。

（ヤコブの手紙2章19節）

日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた。また、悪霊どもも、「あなたこそ神の子です。」と大声で叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは、悪霊どもをしかって、ものを言うのをお許しにならなかった。彼らはイエスがキリストであることを知っていたからである。

（ルカの福音書4章40～41節）

悪霊というのは、サタンの手下です。彼らは全能の神様と神の御子イエス様が、やがてこの罪に満ちた世界を終わらせて、新しい、聖い天地を造られるときに、自分たちをきびしく罰せられることをよく知っています。だから身震いするほど恐れているのです。では彼らが悔い改めて神様やイエス様に仕えるかといえば、その反対なのです。彼らは神様やイエス様に仕え、従うという信仰は決して持とうとはせずに、かえって逆らうのです。このことからもわかるように、信じることと信仰とは別であります。

## 正しい信仰の対象はイエス様

では、信仰にとって最も重要な問題、すなわち「自分にとって究極的な価値や意味を

持っている対象」はだれかという問題ですが、それは申すまでもなく神の御子イエス・キリストであります。しかし、そのことに反感を持たれる方も少なくありません。先頃、私が書きました「医者に治せない病気」を読まれたある方から、次のような手紙をいただきました。

「本を読んで、随所に書かれている、イエス・キリストだけが罪を癒してくださるただひとりの方という部分に抵抗を感じます。キリストは当時の間違った信仰態度を持つ宗教指導者たちが多くいた中で、民衆に正しい道を示すために、そう言ったのです。釈迦も日蓮上人も当時の乱れた宗教に惑わされないために、同じことを言っています。ある個人が、私はイエス様だけを想って精進するというのなら、なんら批判の余地はありませんが、イエス・キリストだけが罪を癒してくださる、ただひとりの方という考え方や、釈迦をはじめとする他の聖者・賢者をとおして神につながろうとする人たちを邪教扱いし、否定する価値観は、結果的に神の教えに反する行為となるのです」というものでした。

この方に限らず、このような批判をなさる方は多いと思います。しかし、それは罪がいかなるものか、罪の赦しというものがどういうものかが、残念ながらまだおわかりになっていない方の考えです。そしてその方は正しい信仰の対象がだれかもご存じないのです。

罪とは何でしょうか。それは自分を愛し、恵もうと手を伸ばしてくださる、唯一にして全能の神のみこころに背を向けて、自分勝手に生きることです。そしてこの罪はいかなる宗教を信じても消すことはできないのです。というのは神様に犯した罪は、神様だけが赦してくださることができるものだからです。

ではどうしたらよいのでしょうか。それはただ一つ、自分が神様に背を向けていたことを認め、心から悔い改めて「神様ごめんなさい」とあやまることです。それが神様に悔い改めるということです。神様は直ちに御子イエス・キリストによって、罪を赦してくださいます。では、そのイエス・キリストとはどんな方なのでしょうか。先ほどの方のように、よくイエス・キリストは釈迦や、孔子のような聖人と同列視されますが、このような比較はまったく見当外れです。というのは、釈迦や孔子は私たちと同じ人間ですが、イエス・キリストは神であり、私たち人間と父なる神様との唯一の仲介者となるために、神の御子でありながら人となられた方であるからです。そして仲介者の役割とは、私たち人間の罪を御子ご自身が身代わりに負って、神の罰としての十字架の刑を受けて死んでくださることであったのです。これについてパウロは次のように言っています。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としての

キリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。

（テモテへの手紙第一 2章5～6節）

もし釈迦や孔子が私たちのために死んでくれても、私たちの罪は依然として残ります。それは彼らがいくら聖人であっても、やはり私たちと同じ人間である以上、罪を最初に犯した人間アダムの血を受け継いで、生まれつき罪の性質を持っている者だからです。

この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもいないから。

（伝道者の書7章20節）

と世界一の知恵者と言われるソロモンが言っているのはこのことであります。

しかし、イエス様は神様ですから、お生まれになってから一度も罪を犯されたことがなく、完全に聖い方です。だからこそ私たちの罪を身代わりに負ってくださることができたのです。聖書に、

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

（コリント人への手紙第二 5章21節）

とあるとおりです。

信仰とは、このイエス様を罪から贖い出してくださった救い主として受け入れるだけでなく、このイエス様と人格的な交わりを持ち、そのイエス様に心から信頼し、従うことです。

## 正しい信仰を得るためには

では、このような信仰は、どのようにして私たちに与えられるのでしょうか。その入り口はまず福音、すなわち、イエス・キリストの十字架と復活のみわざによって、それを信じる者に罪の赦しと永遠のいのちが与えられる、という良き知らせを聞くことから始まります。パウロは次のように言っています。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」しかし、すべての人が福音に従ったのではありません。

「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。」とイザヤは言っています。そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

（ローマ人への手紙10章13～17節）

ここに「信仰は聞くことから始まる」とあります。では、だれから聞くのでしょうか。それはイエス様を信じ、イエス様に従う者からです。その者をイエス様はご自分を証しする使者として、信仰を求めていながらも、まだ信仰の対象がだれか、おわかりにならない方々のところにお遣わしになるのです。先にイエス様を信じた者は、そのような大切な使命が与えられていることを忘れてはならないと思います。

次に、福音を悔いた、砕かれた心で聞くことです。神様は次のように仰せになっています。

わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。

（イザヤ書66章2節）

イエス・キリストの十字架の死が、人間の罪を赦すための身代わりの死であるという良き知らせ、福音を聞いても、それを自分の問題として受け取れなければ、たんなる知識で終わってしまいます。イエス様がこの世におられた時代にも、イエス様の教えに耳を傾

け、それを知的に正しく理解する者はいました。次の律法学者もそうでした。

律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」そこで、この律法学者は、イエスに言った。「先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほかに、主はない。』と言われたのは、まさにそのとおりです。また、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する。』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。」イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。「あなたは神の国から遠くない。」

（マルコの福音書12章28～34節）

この箇所の最後の「イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て言われた。『あなたは神の国から遠くない。』」というところが大切です。イエス様は彼の返事から、彼が聖書をよく

理解している賢い人であることはおわかりでした。だから「あなたは神の国から遠くない」とおっしゃったのです。しかし、ここで注意しなければならないのは、イエス様は「あなたは神の国に、はいることができる」とはおっしゃらなかったことです。イエス様は「あなたにとって神の国は遠くはない、近くに来てはいるけれども、それだけではまだ神の国に、はいれない」ということを彼に示唆されたのです。彼に欠けていたものは何だったのでしょうか。それは砕かれた、悔いた心でした。福音を自分の頭で聞くか、悔いた、砕かれた心で聞くかが、正しい信仰を持つことができるかどうかのわかれ目であります。私たちが悔いた、砕かれた心で福音を聞いたときに、はじめてイエス様の死を自分の問題として受け止めることができるのです。

## 正しい信仰生活はイエス・キリストが土台

では砕かれてイエス様を信じた者のそれからの歩みは、どうしたらよいのでしょうか。冒頭のみことばの中でイエス様は、「わたしを信じる信仰によって、わたしが義人と認めたあなたは、たとえどんな試練に会っても信仰によって生きなさい。もし、そのときに恐れ退くなら、わたしはあなたを喜ばない」とおっしゃっています。イエス様に喜んでいた

だける歩みが信じる者の生き方です。そして、それはイエス様が命じておられる「信仰によって生きる」ことであります。ダビデは、

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

（詩篇16篇8節）

と言っていますが、このように、イエス様はいつも、どんなときでも自分とともにいて守ってくださるという信頼に立った生き方こそが、信仰によって生きる生き方であると思います。けれども、このような生き方は自我が砕かれてはじめてできるものではないでしょうか。ダビデも自我が砕かれ、霊の目が開かれて、その目で主がいつも自分の右におられることが見えたのです。またパウロは信仰によって生きる自分の生き方について次のように証ししています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ人への手紙2章20節）

彼も自らの体験から「自我を持っている古い自分は、イエス様といっしょに十字架につけられて死んだのだから、もう生きてはいない。だから今の自分は自我によって生きているのではなく、イエス様を信じる信仰によって、イエス様と一つにされた者として生きているのだ」と言うことができたのです。

イエス様は信じる者とご自分の関係をぶどうの木と枝にたとえて、ご自分に結びついていることの大切さを諭（さと）しておられます。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

（ヨハネの福音書15章5節）

私たちイエス様を信じる者が正しい信仰の歩みをするためには、このイエス様のみことばのように、自分がたんに枝に過ぎないこと、そして枝は木から離れれば枯れてしまうことをしっかり心に刻んでいなければなりません。そして、イエス様という木にしっかりと繋（つな）がって、日々みことばと祈りによってイエス様から力と知恵とをいただいて歩む者とな

りたいと思います。

はじめに、「信仰というのは私たちにとって究極的な価値や意味を持っている対象と、全人格的な関係を持って、その対象に依存し、献身することである」と申しましたが、これまでに聖書をとおして私たちは、私たちを愛し、私たちのために十字架にかかって死んでくださったイエス・キリストこそ、私たちにとって究極的な価値と意味を持つ方であることを知りました。そしてこの方と全人格的な交わりを持ち、この方に信頼し、仕えることこそ、唯一の正しい信仰であることを改めて覚えることができました。

私たちはこの信仰に堅く立って、パウロが、

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（コリント人への手紙第二4章18節）

と言っているように、肉の目に見えるものによってではなく、肉の目には見えませんが、イエス様によって開いていただいた霊の目で見ることのできるものにしっかりと目を留めて、希望をもって信仰の歩みを続けたいと心から思います。

# 五　永遠の安全保障

主に愛されている者。彼は安らかに、主のそばに住まい、主はいつまでも彼をかばう。彼が主の肩の間に住むかのように。

（申命記33章12節）

おはようございます。阪神大震災のたいへんな試練をくぐり抜けられた主にある兄弟姉妹がたの平安なお顔を拝見できて心から嬉しく思っております。今日は、この聖書の箇所から永遠の安全保障というテーマについてごいっしょに考えてみたいと思います。

## 人間の考える安全保障は頼みにならない

安全が守られる、保障されるということは、人間だれでもいちばん望むことではないでしょうか。ですから個人のレベルだけでなく、企業も、地域も、国家も、世界も、安全の

保障については知恵をしぼって、どうしたら確実な安全を確保できるかを考えています。というのは安全の保障は私たち人間の生存にかかわるたいへん重要な問題であるからです。

けれどもどんなに知恵をしぼっても、いかに科学の力に頼っても、あるいはどんなに人間が互いに助け合っても、悲しいことにそのような確かな安全は保障され得ないばかりか、一瞬先の安全もおぼつかないということを、三か月前の阪神大震災を通して私たちは身にしみて感じたのです。

しかし、イエス様はすでにとうの昔から人間の力に頼っても何の安全の保障もないことを、たとえによって私たちに教えてくださっています。

ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。「どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。」そして言った。「こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』」しかし神は彼に言われた。「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」

（ルカの福音書12章16～20節）

私たちもこの金持ちと同じように、いくら自分で考えて万全と思える備えをしても、それは役に立たないのです。ではあきらめるほかないのでしょうか。いや、あきらめることはありません。それは私たちに永遠の、絶対的な安全を与えると保障してくださる方があるからです。その方は神様であります。

永遠の絶対的な安全保障を確実に与えてくださることができる方は、唯一まことの神様だけなのです。この神様は人間が頭で考え出した観念的な神、偶像の神ではありません。そのような神は案山子のようなもので何もできません。唯一まことの神様はそのような私たちが造った神ではなく、反対に私たちを造ってくださった創造主にして全知全能の神、主権者であられる生ける神です。この神様が私たちに「永遠の安全を保障しよう」とおっしゃっているのです。何というありがたい感謝なお約束ではありませんか。

ではどうしたら私たちはその約束をいただけるのでしょうか。これからそのことをごいっしょに考えてみたいと思います。

## 神から安全保障をいただくための条件

神様から安全を保障していただくためには一つ大切な条件があります。それは神様と自分との関係を正しく回復するということです。しかし神様と人間との正しい関係とは何でしょうか。やさしく言えば、それは親と子のような関係、もう少しくわしく言えば親と子の間に見られる人格的な信頼関係と言ってよいと思います。父と子のような関係が神様と自分との間にあること、これが神様と自分との正しい関係です。神様が人間を造ってくださったときは、神様と人間はまさにその関係にあったのです。けれども悲しいことにアダムをはじめとして、その子孫であるすべての人間は、子として愛してくださる神様に背いて神様から離れてしまいました。親から背き離れた子どもは何をするでしょうか。ろくなことはしません。自分の欲だけを追い求めるわがまま勝手な生き方をして親を悲しませる放蕩息子のような子どもになってしまうのです。私たちもそれと同様に神様に対して放蕩息子のように生きて来ました。人類の歴史を見ればそれがよくわかります。人間の間には争いが絶えません。殺し合い、憎しみ合いの連続です。その原因はすべて神様から背き離れた結果であります。神様との正しい関係を失った人間の姿こそが人類の歴史であり、ま

た私たち一人ひとりの人生であります。

このように神様から背き離れた人間は、生きてはいても死んでいるようなものなのです。パウロは次のように言っています。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

（エペソ人への手紙2章1～3節）

ここに「罪の中に死んでいる」とありますが、それはどういうことなのでしょうか。私たちが生きているとか死んでいると言うとき、それは肉体の生死を言っているのですが、ここで「死んでいる」と言っているのは肉体の死ではなく霊の死のことなのです。

では霊的な死とはどういうことなのでしょうか。神様は人間をお造りになったときに、まず土地のちり、すなわち有機物、無機物からなる物質で肉体をお造りになり、その後でそのからだの中にいのちの息、すなわち霊を吹き込まれました。この霊は神様との交わり

にぜひとも必要なものであり、霊が生き生きと働くときに、人間ははじめて神様のみこころを知ることができます。このように神様のみこころに従って生きることこそ神様が造られた人間本来の生き方であり、人間が人間として生きるというのは、そのように生きることなのであります。ところが神様に罪を犯すと、霊はその働きを失ってしまい、そのため神様のみこころがわからなくなり、盲人のように手探りで歩むようになります。このような状態の人間を死んでいると言うのです。

しかし、神様は霊が死んで肉の欲のおもむくままにわがまま勝手に歩んでいる放蕩息子のような私たちを、なおあわれみをもって愛してくださり、ご自分のもとに立ち返るように祈ってくださっているのです。そして放蕩息子が自分がわがまま勝手に生きたことに気づいて、父親のもとに許しを求めて立ち返るのと同じように、私たちが神様に自分の罪を悔い改めるときに、神様はその罪を御子イエス様に身代わりに負わせることによって赦してくださり、イエス様を信じる信仰によって義と認めてくださり、私たちの間の父と子の関係を修復してくださるのです。

ここまで述べましたように、もし私たちが一時的ではなく永遠の安全の保障を心から願うのなら、それは神様から保障していただくほかなく、そのためには、まず第一にイエス

様によって神様との関係を正しく修復すること、イエス様によって義とされることがどうしても必要なのです。

## 永遠の安全保障は神のことばによって約束されている

それでは次に、神様はどんなみことばによってイエス様に義とされた者に安全保障を約束してくださるのでしょうか。その一例としてイザヤ書には次のように書かれています。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしがあなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。」

（イザヤ書43章1～3節）

神様との正しい関係を回復した者に、神様は私たちが自分の子どもを名前で呼ぶように、「わたしはあなたの名を呼んだ」と仰せになり、たとい火の中、水の中を通るような苦難に会っても「わたしはあなたとともにいるからあなたは安全です。だから安心しなさ

い」と約束してくださっているのです。このように神様の約束のみことばによって、神様に義とされた私たちは心から安全を保障されているという確信を持つのです。

## 永遠の安全保障はイエス・キリストによって約束されている

また神様の安全保障は、十字架のみわざによって贖い出してくださったイエス様のみことばによっても約束されています。イエス様は次のように約束しておられます。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

（ヨハネの福音書10章28節）

イエス様はご自分のいのちに代えて罪から救い出した者に永遠のいのちを与え、さらにこのいのちはだれも奪うことはできないと約束してくださいました。永遠のいのちとは永遠に死ぬことのないいのちです。私たちは医学がいくら進歩しても、人間の力では決して永遠のいのちを手にすることができないのを知っています。しかしイエス様は人となられた神ですから、人間ではとうてい勝利することができない死にも打ち勝って、そのよみがえりのいのちをご自分を主と信じる者に与えてくださり、信じた者をだれにも奪われない

ように守るとはっきり保障してくださっているのです。

またイエス様はご自分を信じる者に、この世が与えるのとは違う平安を与えるとも約束しておられます。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネの福音書14章27節）

この世が与える平安とは一時的なものであり、いつなくなるかわからないようなほんとうに頼りない平安です。そのようなこの世の平安には何の保障もありません。しかしイエス様が信じる者に与えてくださる平安はそういう空しい平安ではありません。イエス様がおっしゃったぶどうの木と枝のたとえのように、ぶどうの木であるイエス様に信頼し、イエス様から離れないでいるかぎり、イエス様からご自身の平安が枝である私たちの中に注ぎ込まれます。ですから、たといどのようなことが起こったとしても、それによって失われるような平安ではないのです。

## 永遠の安全保障はイエス・キリストの祈りによって保障される

また永遠の安全保障は、神様と人間との間をとりなす唯一の仲介者イエス様のとりなしの祈りによって保障されています。

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル人への手紙7章24～25節）

祭司は民のために民に代わって神に仕えるという、神様と人との仲立ちの役を務めます。しかし人間の祭司は私たちと同様に罪ある身ですから、直接聖い神様の前に立つことができず、その職務もごく限られたものになります。けれども人となってくださった神であられるイエス様はそのような不完全な祭司とは違います。神であると同時に人であるイエス様だけが十字架による贖いのみわざによって神様と人間との間をとりなしてくださることができる唯一の仲介者なのです。

またイエス様を信じる信仰によって義と認められた者も、まだ信仰が弱いので、何か少しでも困難が起こると心の平安を失って、うろたえたり、悲しんだりしてしまいがちです。人となって私たちと同じ骨肉と血をお持ちになったイエス様は私たちの弱さをよくご存じであり、そのような弱い者のためにいつも父なる神様にとりなしの祈りをしていてくださるのです。イエス様は父なる神様に次のようにとりなしの祈りをしておられます。

わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。彼らをこの世から取り去ってくださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようにお願いします。

（ヨハネの福音書17章14～15節）

「この世のものではない」ということは、かつてはこの世の支配の下にあった者も、イエス様によって罪から贖い出されれば神様に属するものとされているから、もうこの世のものではないという意味です。このように神様に属する者の安全が、イエス様のとりなしの祈りによって確実に保障されることについて、パウロは次のように証ししています。

神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪

に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ人への手紙8章33～35、37～39節）

イエス様によって罪赦され、神様に義と認められた者は、この世のどんなに強大な力によってもイエス様にある神の愛から引き離されることはなく、死にも打ち勝つ圧倒的な安全が保障されていると、ここでパウロは確信を持って言い切っているのです。

## 永遠の安全保障は聖霊によって保障される

最後に、永遠の安全保障は神様に義と認められた者に与えられる神の御霊、聖霊によって確信することができます。パウロが神の御霊について、

私たちをあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。

（コリント人への手紙第二1章21～22節）

あなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられます。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

（エペソ人への手紙1章13～14節）

と言っているように、神様はイエス様を信じた者の心にご自身の約束を成就されることの保証として神の御霊を与えてくださいます。この神の御霊によって、

私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。

（コリント人への手紙第一２章12節）

とパウロが言っているように、私たちは恵みとして神様からいただいた永遠の安全保障を感謝して確信することができるのです。

これまでごいっしょに考えてきましたように、神様は御子イエス様によって義とされた者に永遠の安全を保障してくださいます。最近はまさにヨハネの黙示録に記されているような、世の終わりが近いことを私たちに啓示する出来事が次々に起こっています。しかしそのような時代にあっても、主から安全を保障されていれば、いつも心に平安があり、喜ぶことができます。希望を持つことができます。詩篇の作者は、

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。

（詩篇４篇７～８節）

と神様に感謝しています。この詩篇の作者は「神様が与えてくださっているものは、この世から得る一時的な安全保障ではなく、何者も取り去ることのできない主から与えられた安全保障ですから、私はいつも喜びと平安に満たされています。神様だけが私を安らかに

住まわせてくださるのです」と、その感謝を賛美の詩にしないではいられなかったのです。私たちもこの詩篇の作者とまったく同じ思いで主に感謝します。

## 「昔からの通り道、幸いの道」を求めよ

私たちは、永遠の安全保障は人間が自分の力で手に入れることは不可能であり、全能者である生ける神様だけが恵みとして与えてくださるものであることを知りました。次のような聖書のみことばがあります。

主はこう仰せられる。「四つ辻に立って見渡し、昔からの通り道、幸いの道はどこにあるかを尋ね、それを歩んで、あなたがたのいこいを見いだせ。」

（エレミヤ書6章16節）

ちょっと読んだだけでは何のことかよくわかりませんが、たいへん含蓄のあるみことばです。神様は「もし、あなたがたがほんとうの幸せ、ほんとうの平安、ほんとうの安全を求めるなら、昔からの通り道、幸いの道を尋ね求めなさい」と仰せになっているのです。

では「昔からの通り道」とは、「幸いの道」とは何でしょうか。それはイエス様ご自身のことなのです。イエス様は次のようにおっしゃいました。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

（ヨハネの福音書14章6節）

前にも申しましたが、私たちが自分の知恵や力によって開拓した道を通っても決して神様のみもとに行くことはできません。神様のみもとに通じる道はただ一つ、イエス様という道だけです。そして神様は「その道は二千年の昔からあなたがたのために用意してある、わたしのひとり子イエスという道です。だからあなたがたはその道を通って、あなたがたの憩い、安全、すなわち永遠のいのちを見いだしなさい」と仰せになっているのです。何と言う愛にあふれたみこころではないでしょうか。

もう一度冒頭のみことばを見てみましょう。

主に愛されている者。彼は安らかに、主のそばに住まい、主はいつまでも彼をかばう。彼が主の肩の間に住むかのように。

（申命記33章12節）

私たちは幼な子だったときに、親の背中に背負ってもらった記憶があります。幼な子にとって親の肩の間は、広くて暖かくて居心地がよくて、安全な場所です。こんなに安全な

ところは子どもにとってほかにありません。けれども、そうかと言って私たちはいつまでも親の背中に背負われ続けることはできません。しかし、イエス様によって義とされた者は永遠のいのちを与えられて、永遠に父なる神様とともに住むのですから絶対に安全なのです。神様に愛されているとは、こういうことなのです。

私たちは、主の肩に背負われているという恵みをいつも覚えながら、このすばらしい永遠の安全保障の恵みを与えてくださった主に、喜びと感謝をもって日々従って行きたいと心から切に思います。

# 六　「真理とは何ですか」

そこでピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのですか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたが言うとおりです。わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」

（ヨハネの福音書18章37～38節）

## 真理とは何か

今日は真理とは何かという、少々堅い、しかしながらたいへん重要な問題について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

ここに名前が出てくるピラトはローマ帝国の総督です。当時のイスラエルはローマ帝国

の支配下にあり、ピラトはその総督としてエルサレムに赴任していました。そしてイエス様が捕らえられてピラトの前に引き出されたとき、イエス様とピラトの間に取り交わされた問答の一部が聖書のこの箇所です。

イエス様はピラトの質問に対して、ご自分がこの世においでになった目的を説明なさいましたが、ピラトにはさっぱり理解できませんでした。「わたしは真理のあかしをするために来た。真理に属する者はみな、わたしに聞き従う」とイエス様がおっしゃった意味が何のことか、彼にはまったくわからなかったのです。

## 人間の考える真理

多くの人はその人生において、一度はいったい真理とは何だろう、ほんとうのことは、いったい何なのだろうと考えることがあるのではないでしょうか。真理という言葉は一般に哲学、あるいは自然科学で使われることが多いようですが、哲学では「真理とは、ある現象に覆い隠されている、その背後にある物事の本質、永遠に変わらない正しい道理をいう」のだそうです。そして人間は昔からその隠された本質とは何か、永遠に変わらない道理とは何かということを、いっしょうけんめいに考えて来ました。哲学者にとってはそれ

が仕事であると言えましょう。では真理が哲学者の知恵でわかったでしょうか。その結果は、求めれば求めるほどわからないという空しさではなかったのではないでしょうか。そのために、ある有名な哲学者は絶望して死にました。

けっきょく、人間が考え出す観念的な真理は、つかまえようがなく、これこそ真理だという確かな手応えを得ることはできないのです。ですから人間は人それぞれに考え出したものを、これが真理だと主張するので真理がいくつも出てくるのです。しかし、真理というものは本質的には一つしかないはずです。いくつも真理があるということは、それらが真理ではないということの証明ではないでしょうか。

## イエス・キリストが説き明かされた真理

しかし、イエス様がおっしゃった真理とはそのような観念的な真理ではありません。イエス様がおっしゃっている真理は、唯一の真理であり、絶対的な真理であり、もし人が心から望めば手にすることができ、それによってほんとうの幸せを得ることができるという真理なのです。そして神の御子イエス様は、まさにその真理を証しするために、そしてその真理を自ら成就されるために、人としてこの世界においでになったのです。しかし、

ローマ総督のピラトには、その意味がわかりませんでした。ですからピラトはイエス様に「あなたの言う真理とは何ですか」と尋ねることしかできなかったのです。

では、これからピラトにはわからなかった、イエス様がおっしゃる真理について、ごいっしょに聖書からさらにくわしくみていきたいと思います。

## 神のことばは真理

まず第一に、イエス様がおっしゃった真理とは神様のことばであります。イエス様は最後の晩餐のとき、父なる神様に祈られた祈りの中で、

あなたのみことばは真理です。

（ヨハネの福音書17章17節）

とおっしゃっています。御子イエス様の父なる神様は、天地万物をお造りになり、それらを支配しておられる主権者の神であり、聖そのもの、義そのものの生ける神です。ですから、この神様のおっしゃるみことばは、永遠に正しく完全であり、まさに真理なのです。では私たちはどのようにして神様のみことばを知ることができるのでしょうか。それは聖書によってであります。多くの著者たちによって何世紀にもわたって書かれ、編集された

旧約三十九巻、新約二十七巻からなる聖書は、著者も時代も異なるにもかかわらず、最初の創世記一章一節から最後のヨハネの黙示録二十二章二十一節までが、一貫した神のみこころを示しているのです。それは私たち人間に対する遠大なる救いのご計画と成就についての神様のみこころであります。神様はこのみこころを私たちにお示しになるために多くの著者の心に働かれ、彼らの手を用いて聖書を著されたのです。したがって、聖書はすべて神のみことばであります。詩篇の一一九篇は、その神のみことばが真理であると賛美している詩であります。

あなたの仰せられるさとしは、なんと正しく、なんと真実なことでしょう。
（詩篇119篇138節）

みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至ります。
（詩篇119篇160節）

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。
（詩篇119篇130節）

これらの賛美の詩からもわかるように、人間は聖書に示されている真理のみことばか

ら、何が正しいか正しくないか、何が善か悪か、何が義か不義かということを正しく判断することができるのです。

昔から倫理学という学問があります。倫理とは何が正しいか、何が正しくないかをわきまえ知ることです。しかし、何が正しいか、正しくないかということをどうして判断するのでしょうか。倫理学ではその判断は倫理学者がします。しかしその判断は学者によって異なるので、ある一つの物事が正しかったり、正しくなかったりというような矛盾が起るのです。医学の分野でも、研究や治療を行なう上で、何はしてもよいか、何はしてはならないかという問題がたくさんあります。たとえば、安楽死、臓器移植、人体実験、遺伝子組み替えなどもそうです。そしてこれらの問題を考え、判断するのが医の倫理あるいは生命倫理の役目です。しかし、人間の知恵によって考えられた基準によって判断するかぎり、絶対に正しいといえる判断はできません。というのは、時代が変わるとともに社会の価値観も変わるからです。

ですから、私たちは人間に与えられている、永遠に変わらない真理である神のみことばを絶対的な基準として、物ごとの善悪、正不正を判断していかなければならないのです。

## イエス・キリストご自身が真理

二番目には、イエス様の言われた真理とはイエス様ご自身であるということです。イエス様が地上を去られるときが迫った日、弟子たちに対して「わたしはあなたがたのために住まいを備えに天国に行って、また迎えに戻って来ます。わたしの行く道はあなた方も知っています」とおっしゃいました。しかし彼らはイエス様のおっしゃった意味がわかりません。弟子のひとりトマスは、

主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。

（ヨハネの福音書14章5節）

とイエス様に聞き返しました。それに対してイエス様がおっしゃったのが、

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

（ヨハネの福音書14章6節）

という、たいへん有名なみことばであります。

「わたしが真理です」とイエス様はずばりとおっしゃいました。そのお言葉にはだれも異論をさしはさむことができない威厳があります。はじめに真理は神のことばだと申しましたけれども、ヨハネの福音書に、

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

（ヨハネの福音書1章1節）

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

（ヨハネの福音書1章14節）

と記されているように、神様のことばが人となって私たちのところへ来てくださった方こそイエス・キリストであり、その真理そのものの方が、神様のお考えとは何か、神様に至る道とは何か、まことのいのちとは何かを自らお示しになるために、この世においでになったのです。

## 真理は御霊によって証しされる

ではイエス様が真理であることが私たちにはどうしてわかるのでしょうか。それは人間の理解をはるかに超えたことですから、私たちの頭ではとうてい知ることはできず、ただ御霊の助けによってのみ知ることができるのです。イエス様は捕らえられる前に、自分は天に戻るけれども、代わりに神様は真理の御霊をあなたがたに遣わすと次のようにおっしゃいました。

わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。

（ヨハネの福音書15章26節）

真理の御霊とは、人となってこの世に来られた、私たちの目に見える真理であるイエス様に対して、目に見えない真理であるイエス様の霊であるということができます。イエス様は地上におられた間は、直接私たちに神様の真理のみことばを語ってくださいましたが、贖いのみわざを成就されて天に戻られた後は、今度は真理の御霊として来てくださり、私たちの霊の目を開いてご自分が神様の真理のことばそのものであることを啓示して

くださったのです。パウロはこれについて次のように言っています。

「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。

（コリント人への手紙第一２章９～10節）

「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことのないもの」とは神様のことばであり、それは人類に対する十字架による罪の贖いのご計画であり、またそのご計画を成就するためにこの世に来られた神の御子イエス様であります。しかし、この真理は決して人間の知恵で知ることはできません。パウロは、

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知

ることがないのは、神の知恵によるのです。

（コリント人への手紙第一 1章18～21節）

と言っており、さらに、神様が人間の知恵で神様のこの真理を知ることがないようにされたのは、

神の御前でだれをも誇らせないためです。

（コリント人への手紙第一 1章29節）

とその理由を説明しています。私たち人間はだれでも、大きなこと、小さなことに関わりなく、自分が考えて何かがわかったとき、あるいは自分の努力で何かを成し遂げたとき、口には出さなくても、内心自分の知恵や、力や、行ないを誇るのではないでしょうか。ですからもし人間が自分の知恵で神様の真理を知ることができたら、それこそ自分を神様と同じレベルに置いて、自分の知恵で神を知ったと誇るに違いありません。これこそ聖書でいうところの罪であります。神様はそのような高慢な者には決してご自分の真理をお示しにはならないのです。神様の真理は人間が自分の知恵で手に入れられるものではなく、へりくだる者に恵みとして与えられるものなのであります。イエス様はこのことを次のようなたいへんわかりやすいたとえで私たちに教えてくださっています。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆすする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。

（ルカの福音書18章9～14節）

神様はパリサイ人のように自分を高くする者、自分を義人として誇る者にではなく、取税人のように心砕かれて自分を罪に汚れた者として神様の前にあわれみを請う者に、恵みとして真理であるイエス様のいのちをお与えになり、義と認めてくださるのです。

## 真理は私たちを自由にする

ヨハネの福音書の中でイエス様は、

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。

（ヨハネの福音書8章32節）

もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。

（ヨハネの福音書8章36節）

とおっしゃっています。これまでごいっしょに考えて来ましたことから、私たちは真理とは神様のことばであり、神の御子イエス・キリストであることを知ることができました。そのイエス様が「もしわたしがあなたがたに自由をあたえるなら、あなたがたはほんとうに自由になる」と約束しておられるのです。

よく社会的自由とか、政治的自由と言います。それは社会的に、あるいは政治的に、何の束縛も受けないで生きること、活動することを意味します。そのような自由はみな肉体的な自由、あるいは精神的な自由であり、また一時的に自由になっても状況や環境が変わればたちまち失われてしまうような自由です。しかし、ほんとうの自由はそのような不確

かなものではなく、どんな状況の中にあっても変わることのない、いつまでも続く自由であります。そしてその自由は肉体的な自由でも精神的な自由でもなく、神様がくださるたましいの自由、霊的な自由なのです。では霊的な自由とは何からの自由なのでしょうか。それは罪の束縛からの自由、罪の奴隷からの解放であります。これについてパウロは次のように言っています。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

（ローマ人への手紙6章6～7節）

罪とは私たちを愛してくださっている天地万物の造り主である神様に従わずに、常に自分を中心として生きることであり、これは神様の仰せに背いて、自分の欲を満たしたアダムの血を受け継いだ私たち人間すべてに生まれつき染みついた性質です。ですから人間は自分の力でこの罪の性質を直すことができません。罪の束縛からの脱出は自分でどんなに努力してもできないのです。この罪からの解放はパウロが言っているように、イエス様を救い主と信じる信仰によって、罪のからだがイエス様の十字架とともに死に、イエス様の

よみがえりのいのちをいただいて新しく生まれ変わることによって、はじめて達成されるのです。このように、罪からの自由は真理が人となられたイエス様だけが与えてくださる恵みの賜物なのであります。

## 真理は私たちに永遠の幸せをもたらす

四世紀に、アウグスチヌスという信仰の厚い人がいました。彼は「人を幸福ならしめるのは、真理の探求ではなくして、真理の所有である」という有名な言葉を残しました。前にも申しましたように、昔から人間は幸福になるためには真理を探り求めなければならないと考えて、自分の頭でいっしょうけんめいに真理を探求して来ました。しかし、それは無駄な努力であって、空しさが残るだけでした。そうではなく幸福になるためには真理を所有することであるということを、アウグスチヌスは自らの信仰によって確信することができたのです。真理を所有することとは、もうおわかりのようにイエス様を信じてまことのいのちを持つことであります。そのためにイエス様が私たちの住む世界に来てくださり、真理の証しとして尊いご自分のいのちを私たちに与えてくださったのです。私たちは改めてイエス様に心から感謝したいと思います。

# 七　主との交わり

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

（コリント人への手紙第一1章9節）

今日はこの聖書の箇所から、主との交わりということについてごいっしょに考えてみたいと思います。

## 主とは

私たち日本人にとって、主という言葉は馴染（なじ）みがなく、一般には「しゅ」とは読まずに「ぬし」とか「あるじ」と言います。そして主は主人あるいは主君という言葉で表現されるように、中心になる人、家長や支配する人などを意味しています。けれども聖書で主と

お呼びする対象は人間ではなく、私たちを含めて天地万物をお造りになった神様と神の御子イエス・キリストであります。すなわち聖書では、神様や御子イエス様と私たち人間は主従の人格的信頼関係にあり、神様、御子イエス様は主人がしもべに接するように私たちを愛し、養い、守り、また私たち人間はしもべが主人に接するように、神様、イエス様に仕え、従うという関係なので、神様と御子イエス様だけを主とお呼びするのです。したがって霊の目が罪のために閉ざされているときは、神様が自分にとってどのような方かわかりませんから主とお呼びできないのはとうぜんであり、神様のあわれみによって神様に目を留めていただき、イエス様を救い主と信じる信仰を与えられて霊の目が開かれたときに、はじめて神様、イエス様を主とお呼びできるのです。

しかしイエス様を信じた者も、このことをはっきり意識しないで、習慣的に「主よ、主よ」と言っていることがあるのではないでしょうか。もしそうであれば問題です。イエス様はそれをたしなめて次のようにおっしゃっています。

わたしに向かって、「主よ、主よ。」と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。

（マタイの福音書7章21節）

イエス様はここでご自分を口先だけでなく心から主と信頼して、神様のみこころに従う者だけが天国にはいることができると言っておられるのです。

## 主のしもべに必要なこと

冒頭の聖書の箇所にありましたように、恵みによって神様に目を留めていただき、召し出されて主のしもべとされた者は、それからは主との交わりに入れられて人生の歩みを歩むことになります。人生は主のしもべとされた者にとって必ずしも穏やかな日々ではありません。嵐の吹き荒れる日も多いのではないでしょうか。そのような苦難の日には主のしもべは何に頼るべきでしょうか。神様と御子イエス様を主と信じる前には自分の力や、人の知恵や、偶像の神に頼ったでしょうが、主のしもべとされた今は、そのようなものは何の頼りにもならず、主と交わり、主に頼ることこそが人生の嵐を乗り越える唯一のたしかな方法だということがよくわかるのです。

主との交わりの大切さは、潜水夫と彼に空気を送る人の関係にたとえることができます。イエス様を信じた者がこの世に置かれているのはなぜでしょうか。それは主のしもべとして働くためではないでしょうか。そしてそのためには主としっかり結ばれていること

がぜひとも必要です。海底で働く潜水夫は、海上の船とホースで繋がれています。潜水夫が十分に働けるためには、このホースを通して新鮮な空気が送り込まれる必要がありますが、主と主のしもべとの関係もこれとまったく同じです。主の潜水夫は、自分の楽しみのために潜ったり、自分の宝を探すために潜ったりするのではありません。主の潜水夫は主にとって大切な宝である、失われたたましいを探して主のところに導く作業をするために、暗い海底、闇の世界で働くのです。しかし、主の潜水夫が十分に働くことができるには、主との間を繋いでいる太いホースから絶えず御霊という新鮮な空気を豊かに送り込んでいただかなければなりません。もし主とのしっかりした交わりがなくなれば、空気を絶たれた潜水夫のように、御霊を絶たれた主の潜水夫の霊はたちまち死んでしまいます。

そのようなわけで、主のしもべにとってたいへんに大切な主との交わりについて、さらに考えたいと思います。

## 主との交わりの基礎は人として来られたイエス・キリスト

まず最初に、人間が主と交わるためにどうしても必要なものは何かを考えてみたいと思います。それは天におられる聖い神様と地上に生きる罪に汚れた人間とを結ぶパイプでは

ないでしょうか。そしてイエス様はまさにこのパイプになるために、神であられながら人としてこの世に生まれてくださったのです。パウロはこれについて、

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。

（テモテへの手紙第一２章５節）

と言っています。またヘブル人への手紙にもパイプとしてのイエス様の役割について、

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル人への手紙７章24～25節）

と書いてあります。イエス様は人間の罪を十字架の死によって贖うためだけにこの世においでになったのではありません。贖いのみわざを終えられて天に戻られた後も引き続いて主なる神様と人間の間の唯一のパイプ役、唯一の仲介者として、いつもとりなしをしてくださり、祈ってくださっているのであります。

## 主との交わりは御霊を介してなされる

私たちは主との交わりになくてはならないパイプがイエス様であることがわかりました。ではパイプ役であるイエス様は、実際には何によって父なる神様と人間との間の意思疎通ができるようにしてくださるのでしょうか。それは御霊によってであります。パウロがコリントの教会の信者に宛てた手紙の中で、

私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

（コリント人への手紙第一 2章12～14節）

と言っているとおり、主のしもべが主のみこころを正しくわきまえ知り、それに従うため

には、人間の知恵によってではなく、信じる者に恵みとして神様から与えられた神の御霊に教えられ、導かれることがどうしても必要なのです。

## 主との交わりによって与えられる恵み

では主との交わりによって主のしもべに与えられる恵みは何でしょうか。たくさんあると思いますが、その一つは主なる神様、主なるイエス様からの励ましであります。主は主のしもべに次のように約束しておられます。

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。

（イザヤ書43章2～3節）

主のみことばによる約束は、御霊を介して苦難の中にある主のしもべに大きな励ましを与えます。

また主から平安と勇気が与えられます。イエス様は、

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネの福音書14章27節）

と約束してくださいました。イエス様を信じた者に与えられる平安とは、勇気とは何でしょうか。それは人間が手にすることができるような、目に見える一時的な平安ではなく、また自分の意思の力で奮い起こす勇気ではなく、このように語りかけてくださるイエス様のみことばの確かさを確信することから生まれる、イエス様への全き信頼による霊的な平安と勇気であります。

## 主との交わりを妨げるもの

しかし、主と主のしもべとの交わりを妨げようとする力は絶えず働いています。この妨げの力、妨げの原因は何でしょうか。

まず妨げの大きな原因は主のしもべが着ている肉の衣であります。イエス様を信じる信仰によって主のしもべとされた者は、古い人は死んで新しく生まれ変わります。しかし霊

は信じた瞬間に生まれ変わりますが、肉が生まれ変わるのは復活して天に帰られたイエス様が主のしもべを迎えにふたたびおいでになるときであります。したがって天に召されるまでは霊は罪を犯しやすい肉の衣を着て地上に生きなければなりません。そしてこの肉が欲望を起こして人と争ったり、うらやんだり、憎んだり、ねたんだりするのです。ヤコブの手紙には主のしもべの争いについて次のように書かれています。

何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょう。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。

（ヤコブの手紙4章1～2節）

そして、その欲望に弱い肉を誘惑するのがサタンです。サタンは主のしもべを主との交わりから引き離すことだけを唯一の楽しみにしています。何とかしてふたたび自分の配下に入れようとあらゆる策略をもって誘惑してきます。主のしもべはそのサタンの誘惑を察知して、サタンにつけ入るすきを与えないようにしなければなりません。けれどもサタンは人間よりはるかに強く、悪賢いので、主にしっかりと結びついていないかぎり、とても

自分の力でこの誘惑を察知して防ぐことはできません。ペテロの手紙第一には、

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。

（ペテロの手紙第一 5章8～9節）

と書かれています。「目をさませ」の目は、霊の目のことであり、私たちの脳は酸素が欠乏すると眠くなりますが、それと同じように霊も御霊が欠乏すると眠ってしまいます。「堅く信仰に立つ」とは主と堅く結びつくことであり、主から御霊を十分にいただくことであります。ですから主に堅く結びついて御霊によって霊の目をはっきり開いてさえいれば、サタンを恐れることはないのです。

## 主との交わりが失われたときに現われる霊的徴候

イエス様との結びつきがなくなると主のしもべの霊はとたんに衰えて眠くなることは、今申したとおりです。では主のしもべの霊が衰えて眠くなると実際にはどういうことが起こるのでしょうか。

まず霊とまことをもって礼拝することができなくなります。よく聖日礼拝にきちんと出席するか、しないかが信仰の尺度にされますが、イエス様が、

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。

（ヨハネの福音書4章24節）

とおっしゃっているとおり、ただ形式的、義務的に礼拝に出席しても意味はありません。私たちの心の中をご覧になる主は、そのような礼拝を喜ばれません。

また霊が衰えると、とうぜんながら主に祈れなくなります。祈りは主の霊と主のしもべの霊との間でなされる霊的交流です。先ほど潜水夫のたとえをお話ししましたが、主の潜水夫がこの世の闇の海底でいろいろな問題に遭遇したときに、それを祈りとして「主よ、どうしたらよいでしょうか」と主のみこころを聞き、主から答えをいただきながら問題を解決していく、この作業が主との祈りをとおしての霊的な交流です。ところが主のしもべの霊が衰えると、そのような祈りができなくなります。祈るには祈りますが、霊が眠っている状態での祈りですから、まったく形式的な祈りになってしまいます。そのような祈りには主はお答えになりようがないのです。

さらにまた霊的衰弱の徴候として正しい霊的判断ができなくなります。主のしもべには主のみこころを知り、それに従うことが求められています。主のみこころは主から日々みことばによって、また祈りによって与えられます。イザヤ書に、

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

（イザヤ書30章21節）

とありますが、このように主の仰せを正しく聞き取って、示された道を選択することができるためには、霊の耳がはっきり開かれていなければなりません。主は絶えず主のしもべの霊の耳元で「これが道だ。これに歩め」と語ってくださるのですけれども、主との交わりが失われると、霊の耳が閉ざされて主の声が聞こえなくなり、肉的な判断しかできなくなります。そうなれば光か闇かの区別もつかなくなり、どんどん誤った方向に迷い込んでしまうのです。

## 霊的衰えに気づいたら

では自分にこのような霊的な徴候があることに気づいたら、そのときどうしたらよいの

でしょうか。なすべきことはただちに主に心から悔い改めて、主のもとに立ち返ることです。イエス様は主なる神様と人間との関係を父親と放蕩息子のたとえでお話しになっていますが、放蕩息子は放蕩ざんまいをして父を悲しませていたことに気がついたとき、心から悔い改めて次のように決心しました。

立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。

（ルカの福音書15章18～20節）

ここで私たちはこの中に大切なことが含まれていることに注意したいと思います。それは心からの悔い改めは、口先だけのものではなく、この放蕩息子のように自分の霊の足で立ち上がってイエス様のもとに立ち返るという行動が伴わなければならないということです。ほんとうの悔い改めには行動が伴うはずであります。このようにして主に立ち返れば主はよく帰ってきたと喜んでその悔い改めを受入れてくださり、ふたたびご自分との交わりを回復してくださいます。しかしそれがどうしてわかるのでしょうか。それは霊に喜び

と平安が戻ってくることでわかります。これは体験なさった方ならどなたでもよくご存じでしょう。そしてそのとき、私たちの祈りは感謝と賛美の祈りに変えられるのです。

## 主との交わりのゴール

これまで述べましたように、主のしもべと主との交わりは、主から心が離れては、それに気づいて悔い改めて主に立ち返るというくり返しです。しかしただくり返すだけではなく、その間に次第に主のしもべの霊は御霊によって成長させられ、聖められて行き、ついに主とお会いできるときを迎えるのです。主のしもべが潜水夫としてこの世の海底に置かれて働く意味はここにあるのだと思います。主のしもべはいつまでも海底で働くのではありません。御霊を送り続けてくださった主と、やがてかならず海上で、すなわち天国で、潜水服を脱いで顔と顔を合わせてお会いできるのです。パウロはそのときの状況を次のように言い表しています。

今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。

（コリント人への手紙第一 13章12節）

そのときには、主と主のしもべとの間には、もはや交わりを妨げるものは何一つありません。主のしもべは主と一つになって喜び楽しむことができます。主との交わりのゴールがそれであります。

主のしもべとされた者は、自分を愛してくださり守ってくださり、天国にまで迎え入れてくださる主と顔と顔を合わせてお会いできるという、すばらしい希望が実現する日がまもなく来ることを確信して、その日を待ち望みながら、この世という海底の旅路を、御霊をとおしての主との交わりをいよいよ強めながら歩み続けて行きたいと切に思います。

# 八　主イエスからの心離れ

汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。そこで、「出て来た自分の家に帰ろう。」と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。そうなると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです。

（マタイの福音書12章43～45節）

## 信じた者の心がキリストから離れる

今日は、イエス様を信じたにもかかわらず、心がイエス様から離れたらその人はどういう状態になるのか、またそのようなことが起こるのはどうしてなのだろうかという、信じ

る者にとって深刻な問題について、これからごいっしょに考えてみたいと思います。

まずイエス様から心が離れると、その人はどのような行動や態度を取るようになるのか、またどんなときに心が離れてしまうのかについて考えてみたいと思います。

## ふたたびこの世を愛するようになる

一つには、その人はイエス様を信じる前に愛していたこの世を、ふたたび愛するようになってしまいます。イエス様を滅びに至る自分の罪を贖ってくださった救い主と信じたとき、私たちはこの世のものからは決して味わえない霊的な喜びを与えられ、イエス様に心から感謝と賛美をささげたはずです。ところがイエス様から心が離れると、その感謝の思いは薄れ、ふたたびこの世のもの、目に見えるもの、肉的なものに心を奪われ、それを愛するように戻ってしまいます。

パウロは弟子のテモテに宛てた手紙の中で、自分とともに主のしもべとして苦労しつつ福音を宣べ伝えていた弟子デマスが、イエス様から心が離れてこの世を愛してしまい、パウロのもとから去っていったことを嘆いて、

デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまい……

と書いています。ヨハネがその手紙に、

（テモテへの手紙第二4章10節）

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。

（ヨハネの手紙第一2章15節）

と警告していますが、イエス様から心が離れてふたたびこの世だけを愛するようになってしまった者の心の中からは、もはや神様やイエス様に対する愛は消え去ってしまっているのです。

## ふたたび律法の奴隷となる

また、イエス様から心が離れると、ある人はふたたび律法の奴隷になってしまいます。そのような人に対してパウロはガラテヤ人への手紙の中で次のように戒めています。

ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。

（ガラテヤ人への手紙4章9節）

「あの無力、無価値の幼稚な教え」とは、ユダヤ人がモーセをとおしてお示しになった神様の律法のほんとうの意味を解さずに、いろいろな規則を作ってそれを形の上だけでも守りさえすれば、それで義とされるというユダヤ教の誤った教えを指しています。そしてその教えを守ることに縛られて苦しんでいる人のことを律法の奴隷といいます。またユダヤ教だけではなく、善行や慈善などの行ないや人間の作った戒律を守ることによって義と認められようとしているすべての人も律法の奴隷です。イエス様を信じた者はこのような無価値なものの束縛からイエス様の贖いのみわざによって解放されているにもかかわらず、まだ心の中に行ないによって神様、イエス様にではなく、人から義と認められたいという的はずれな思いのかすが残っている人は、イエス様から心が離れると、ふたたびこの律法の奴隷となってしまうのです。

## 霊的な熱心を失なう

イエス様から心が離れると、とうぜんのことながらその人からは熱心な信仰が失われます。イエス様はヨハネの黙示録の中で次のようにおっしゃっています。

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。

（ヨハネの黙示録3章15～16節）

はじめに自分の力ではどうしても逃れられない恐ろしい罪を、イエス様がご自分のいのちの代価を払って清算してくださったことを知ったとき、私たちはどんなに喜び、イエス様に感謝したことでしょうか。そしてこれからはどんなことがあっても、このイエス様を愛し、イエス様に付き従って信仰の歩みを続けようと決心したのではないでしょうか。しかし、時が経つにしたがって、その熱い霊的な思いはだんだんと冷えて、イエス様から心が離れ、信仰の歩みもなまぬるいものになってしまう者が多いことをイエス様はこのように警告しておられるのです。

## 選ばれた者と思い上がって高慢になるとき

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていな

いかのように誇るのですか。

（コリント人への手紙第一４章７節）

ユダヤ人は自分たちは神様に選ばれた民族だという強い自負があります。それは彼らが特別に優れた民族、強い民族であったからではありません。申命記に、

主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。

（申命記７章７～８節）

と記されているように、神様の選びというのは、ユダヤ人の側に選ばれるだけの何の理由もなく、ただ一方的な神様のご意思によるものなのです。同じようにイエス様を信じた者にも心ひそかに自分は他の人とは違い神様に選ばれた者だという優越感を抱く場合があります。しかし、パウロが言っているとおり、私たちには神様の前に何の誇るべきものも持ってはいないのです。私たちは自分が優れているから、立派だから、救われたのではな

いのにもかかわらず、イエス様の愛とあわれみを忘れて、あたかも自分が救いの対象に選ばれるだけの素質があるから信仰を持つことができたのだという高ぶった思いを持つ恐れがあります。このような高慢な思いが主イエス様から心が離れる原因となります。

## 自分に都合のよい利益が得られないとき

また、イエス様を信じても、自分が思っていたようなご利益が得られないことに失望すると、イエス様から心が離れてしまいます。イエス様はご自分のいのちに代えて罪から救い出してくださった者に、ご自分の永遠のいのちを与えてくださり、また天国に住む住まいを用意してくださいます。これこそ人間がどんなに努力しても絶対に手に入れることができないすばらしい恩恵ではないでしょうか。パウロはコロサイ人への手紙の中でコロサイの教会の信者に、

もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

（コロサイ人への手紙3章1～2節）

と書いているのは、イエス様を信じることによって、イエス様とともに十字架の上で死に、イエス様のよみがえりとともに生まれ変わった者は、すでに神様に属するものとされたのだから、肉に属する地上のものに心を奪われずに天にある宝にだけ心を向けなさいという戒めであります。しかし、もしイエス様の与えてくださる霊的な恵みのすばらしさがわからず、イエス様を求める心の中に、この世のご利益を求めたいという肉の願望が少しでも残っていれば、その人は期待していたご利益がないと失望してイエス様から心が離れるのです。

## この世の富を得たとき

また、この世の富を得ることもイエス様から心が離れる原因になります。申命記には神様を信じて従う者に対して、

あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。

（申命記8章12～14節）

という警告が与えられています。また、イエス様は信じる私たちに、

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

（マタイの福音書6章19～21節）

とおっしゃっています。「あなたの宝のあるところにあなたの心もある」というイエス様のみことばは、まったくそのとおりです。イエス様が私たちのために朽ちない宝を天に備えてくださっているにもかかわらず、肉の目に見えるこの世の富に心がうばわれるとき、私たちの心はイエス様から離れるのです。

## 試練や迫害に会ったとき

さらに、信じた者でもいつもイエス様に心から信頼し、おゆだねしていないと、試練や迫害に会えばすぐにイエス様から心が離れます。イエス様は種蒔きのたとえで私たちに注意してくださっています。

岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。

（マタイの福音書13章20～21節）

イエス様はここで、もし私たちの心がかたくなで岩地のように自我が強ければ、主のみことばを受け入れてもイエス様にしっかり根づくことができないために、信仰がゆすぶられるような試練が起これば、すぐにご自分から心が離れてしまうことをこのたとえで私たちに教えてくださっているのです。

## キリストから心が離れた人の結末

ではイエス様から心が離れた人はどのような結末を迎えるのでしょうか。イエス様はご自分から離れた者の結末について、次のようなたとえで説明しておられます。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。だれでも、もしわたしに

とどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

（ヨハネの福音書15章5～6節）

私たちの信仰はイエス様にしっかりと繋（つな）がっているときにのみ、実を結ぶことができます。しかし、イエス様から心が離れていれば、実を結ぶどころか、信仰は枯れ果てて燃えてしまい、その結果イエス様からいただいた愛も、希望も、平安も消え失せてしまいます。ここで冒頭のみことばをもう一度見てみましょう。

汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。そこで、「出て来た自分の家に帰ろう。」と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。そうなると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。

（マタイの福音書12章43～45節）

イエス様を信じた者の霊は、イエス様の血によってきれいに洗い聖められ、イエス様によって満たされています。ところがイエス様から心が離れると、そこは空き家になりま

す。するとイエス様に追い出された悪霊、すなわちサタンの手下どもが、またきれいになったその空き家に喜んで入り込んで来て住み着いてしまいます。そうなると、その人の霊の状態はイエス様を信じる前よりもさらに悪くなり、サタンの手下どもに翻弄（ほんろう）されて、以前にも増して争い、怒り、憎しみ、苦しみ、悲しみ、不安、恐れなどでいっぱいになってしまい、サタンを喜ばせるだけの日々を送るようになってしまうとイエス様はおっしゃっているのです。

## 「悔い改めて立ち返れ」と呼びかけられるキリスト

ではイエス様から心が離れてみじめな状態になった者をイエス様は見放されるのでしょうか。イエス様はそのような者をすぐには見放されません。むしろあわれんで「悔い改めてわたしに帰れ」と呼びかけてくださいます。

あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

（ヨハネの黙示録2章4～5節）

「初めの愛」「初めの行ない」とは、イエス様を信じた当初のイエス様に対する愛であり、愛するイエス様に仕え従うという信仰に基づく行ないのことです。そしてイエス様はイエス様に対する愛から心が離れてしまった者にも、なお愛をもって、「あなたはどこから落ちたのか思い出して悔い改めなさい」と熱心に呼びかけてくださっているのです。しかし同時にイエス様はその呼びかけにも耳をかさず、いつまでもかたくなに悔い改めをしない者に対しては、イエス様がはじめに灯してくださったまことの光である、イエス様を灯す燭台を取り外すと警告しておられるのです。

私たちはイエス様のこの警告を謙虚に受け止めなければなりません。そして、すなおに自分の心の中を吟味したとき、この世を愛するようになっている自分に気がついたら、あるいは偶像や律法に仕えるようになっている自分に気がついたら、また霊的になまぬるい状態になっている自分に気づいたら、それはイエス様から心が離れている徴候であることを認めて、少しでも早く心からの悔い改めをもって、イエス様のもとに立ち返ろうではありませんか。そうすればイエス様は放蕩息子の父のように、喜んで私たちをふたたび迎え入れてくださいます。最後に、放蕩息子のたとえの中から一か所お読みして終わります。

立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。

（ルカの福音書15章18～20節）

# 九　信仰による決断

信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。

（ヘブル人への手紙11章7節）

今日は聖書のこの箇所から、信仰に基づく決断ということについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

私たちは神様の愛とあわれみによって神の御子イエス様を自分の罪の贖い主と信じることができ、今までの罪にまみれた自分はイエス様とともに十字架につけられて死んだことを知りました。そしてその結果、サタンの奴隷、罪の奴隷から解放され、復活されたイエス様のいのちに与かって新しく生まれ変わり、主のしもべとしてイエス様とともに生きる

という恵みに与かりました。パウロはこれについて、

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

（ローマ人への手紙6章4～8節）

と言っています。

しかしながら、主のしもべとされても、なお地上に生かされている間は日々いろいろな問題が次ぎ次ぎに起こりますから、その都度どうすべきか決めなければなりません。この世の人であれば、どうすべきかの決断はとうぜんながら人間の知恵や経験に基づいてされ

ます。けれども主のしもべとされた者は、このような場合に右に行くか、左に行くか、進むか、止まるかの決断は、人間の知恵によってではなく、信仰に基づいてされなければなりません。にもかかわらず、ややもすれば私たちはうっかり自分の思いや自分の肉の知恵で物事を決めてしまい、後になって後悔することが多いのではないでしょうか。そこで今日は信仰に基づく決断は、何のためにするのか、またどのようにしたらよいのかを、聖書から考えてみたいと思います。

## 信仰に基づく決断は何のために、またどのようになされなければならないか

### その一　自分のためでなく、主のためになされる

まず信仰に基づく決断は自分のためではなく、主のためにしなければならないことを、わきまえ知ることが大切です。この良い例は次のソロモンの願いの中に見ることができます。

「わが神、主よ。今、あなたは私の父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし、私は小さい子どもで、出入りするすべを知りません。そのうえ、しもべは、あなたの選んだあなたの民の中におります。しかも、彼らはあまりにも

多くて、数えることも調べることもできないほど、おびただしい民です。善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」この願い事は主の御心にかなった。ソロモンがこのことを願ったからである。神は彼に仰せられた。「あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。

（列王記第一　3章7～12節）

ソロモンは自分のためにではなく、神様に選ばれた民であるイスラエルの人々の訴えを王として正しく判断することができるために、言いかえれば神様ご自身のご栄光のために、正しい判断力をお与えくださいと願い求めたのです。ソロモンのように、自分のためではなく、神様のために正しい決断をしたいと心から願う者には、神様はご自分の知恵と判断力をお与えになり、みこころに適う正しい判断をすることができるようにしてくださるのです。

その二　祈りによってなされる

また、信仰に基づく決断は祈りによってなされることが大切です。その良い手本はイエス様のゲッセマネの祈りに見られます。

父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。

（ルカの福音書22章42節）

神様であられながら人としてこの世に来てくださったイエス様は、私たち人間と同じ肉の痛みの感覚をお持ちになっていました。ですからできることなら十字架のたいへんな苦しみは避けたいと思われたのはとうぜんのことでした。もちろん死人をよみがえらせる力をお持ちのイエス様は、十字架の刑から逃れることはたやすいことでした。しかしイエス様はご自分の肉によって決断をすることはなさらず、どうすべきかを父なる神様に祈られました。そして祈りによって示された十字架への道を父なる神様のみこころとして選択する決断をなさったのです。祈りは主のしもべと神様、イエス様とのたいへんに重要な霊的通信手段であると言えましょう。私たちがまずイエス様と呼びかけて、自分が直面してい

る問題について、

私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

（詩篇143篇8節）

と心からイエス様に祈れば、イエス様は必ずみこころを私たちの霊に示してくださるはずです。このように私たちもイエス様にならって、みこころに基づく決断をしたいと思います。

その三　みことばに基づいてなされる

また信仰に基づく決断は聖書のみことば、すなわち神様のみことば、イエス様のみことばに基づいてなされることが大切です。なぜなら神様、イエス様は聖書のみことばによってみこころを私たちに示してくださるからです。

あなたのさとしは奇しく、それゆえ、私のたましいはそれを守ります。みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。御名を愛する者たちのために、あなたが決めておられるように、私に御顔を向け、私をあわれんでください。あなたのみことばによって、私の歩みを確かにし、どんな罪にも私を支配させ

ないでください。

（詩篇119篇129～133節）

この詩篇の作者は、みことばがわきまえのない者に悟りを与えることを知っており、みことばによって自分の歩みを確かなものにしたいと願いました。私たちも決断する前にはまずみことばを祈り求め、みことばによってみこころにかなう正しい判断をすることができるようにしたいと思います。

その四　決断したら持続すること

最後に信仰に基づいていったん決断したら、決断したことを持続することが大切です。詩篇一一九篇の作者は次のように神様に堅く約束しました。

私は、あなたのおきてを行なうことに、心を傾けます。いつまでも、終わりまでも。

（詩篇119篇112節）

信仰によって示された決断は、主のみこころなのです。「私はあなたのおきてを行なうことに心を傾けます」というところを、「私はあなたのみこころを行なうことに心を傾けます」と読み替えてもよいと思います。心を傾けるということは一瞬だけではありませ

ん。持続することです。

いったん神様のみこころが示されて決断したならば、私たちは少々の試練や困難に遭ったからといって、勝手に方針を変えたり、中止したりしてはなりません。では行き詰まったときはどうしたらよいのでしょう。そのときはまず信仰に基づいて決断したと思っても、実は自分の思いであったのではないかと自分自身の心を吟味し、もしそうであったことが示されたなら、すぐに悔い改めてから、さらにイエス様に祈り、みこころを問い、ふたたびみことばと御霊に導かれて決断をすればよいのです。

## 信仰に基づく決断をしなければならぬ理由

イエス様を信じる者が信仰に基づいて決断をしなければならない理由はどこにあるのでしょうか。それは主のしもべとされた者のこの世における日々の霊的歩みが、常に生きるか死ぬか、祝福かのろいか、言いかえれば神の側か、サタンの側かの選択に立たされているからです。前にも申しましたが、私たちは主のしもべとされた後も、この世にある間はサタンの誘惑に弱い肉の衣を着ていますから、日々の歩みの中でいかに自分が愚かで弱い者であるかということを痛いほど思い知らされます。世界一賢い人ソロモン王も次のよう

に言っています。

人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。（箴言20章24節）

ですから、そのような者が主のしもべとして歩むためには、何事も信仰に基づいて決断する必要があるのです。

## 信仰に基づく決断の例

聖書の中には信仰に基づいて決断された例がたくさん記されていますが、その中から三つの例をご紹介します。まず冒頭の聖書の箇所にあるノアの信仰に基づく決断の例です。

信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。（ヘブル人への手紙11章7節）

創世記の六章から八章にかけては有名なノアの箱舟のエピソードが記されています。地上に人間の悪が増大し、その心に計ることがいつも悪いことだけに傾くのをご覧になった

神様は、洪水によって地上から堕落した人間を消し去ろうと決心されて、神様に従って神様のみこころにかなう正しい歩みをしていた唯一の人ノアに次のように仰せになりました。

すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を造りなさい。

（創世記6章13～14節）

わたしは今、いのちの息あるすべての肉なるものを、天の下から滅ぼすために、地上の大水、大洪水を起こそうとしている。地上のすべてのものは死に絶えなければならない。しかし、わたしは、あなたと契約を結ぼう。あなたは、あなたの息子たち、あなたの妻、それにあなたの息子たちの妻といっしょに箱舟にはいりなさい。

（創世記6章17～18節）

しかしノアが神様の仰せを聞いたとき、彼の住んでいる地上にはまだ何の変わったところはなく、まして洪水の気配などまったくありませんでした。ですから世の中の人々は、平和だ、平和だと言って、飲んだり食べたり、のんきに楽しく暮らしていました。そのようなときに神様は箱舟を造れとノアに命じられたのです。

創世記に記されている箱舟の大きさは、長さが一三二メートル、幅が二二メートル、高さが一三メートルという非常に大きなものです。ノアはこの巨大な箱舟を造るにあたって、なぜこんな大きな舟を苦労して造らなければならないのかと少しも疑わず、信仰に基づいて神様のみこころにただ「恐れかしこんで」従い、決断して造りました。人々はみな彼のしていることを見て嘲笑（ちょうしょう）しました。しかし笑われようと、嘲（あざけ）られようと信仰に基づくノアの決断は変わらず、揺るがなかったのです。その結果、神様のお約束通りにノアと彼の家族だけが大洪水による滅びから救われました。

二つ目の例はアブラハムがわが子イサクを神様にささげた例です。

信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。

（ヘブル人への手紙11章17～19節）

これは創世記二二章に記されているエピソードです。アブラハムも神様を恐れる人であ

り、神様に愛される人でした。そのアブラハムに神様は「あなたの愛しているひとり子のイサクをいけにえとしてわたしにささげなさい」と仰せになったのです。以前にアブラハムは神様から「イサクの子どもがあなたの子孫と呼ばれる」という約束をいただいていたので、ふつうならば「神様のあのときの約束はいったい何だったのか、愛するたったひとりの子イサクを神様にささげたら、神様の約束が実現するという希望も失せ果ててしまうではないか」と神様を恨むところですが、アブラハムはそうは思いませんでした。彼は「神には人を死者の中からよみがえらせることもできる」というように神様に堅く信頼していたのです。その信仰に基づいてアブラハムはイサクをささげるという大きな決断をし、その決断をまさに実行しようとしたのです。そのとき神様はどうなさったでしょうか。創世記には次のように記されています。

アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふろうとした。そのとき、主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたし

にささげた。」

（創世記22章10～12節）

アブラハムは信仰に基づく決断をしただけではなく、それをひるがえすことなく実行しようとしました。神様は彼の信仰が堅いかどうかを知ろうと彼を試みられたのです。

三つ目の例はモーセの信仰に基づく決断です。

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。

（ヘブル人への手紙11章24～25節）

これは出エジプト記二章に記されているモーセの信仰に基づく決断のエピソードです。イサクの子ヤコブの一族がエジプトに移住してから三百年以上経った当時のエジプトではイスラエルの民の数がおびただしく増え広がり、そのために脅威を感じたエジプトの王パロはイスラエルの民に過酷な労務を課し、また生まれた男子はみなナイル川に投げ込んで殺すように命じました。モーセもとうぜんそのようにして殺されるはずでした。ところが神様のみこころによって彼はパロの娘の子として育てられることになったのです。これに

ついて出エジプト記二章に次のように記されています。

パロの娘が水浴びをしようとナイルに降りて来た。彼女の侍女たちはナイルの川辺を歩いていた。彼女は葦の茂みにかごがあるのを見、はしためをやって、それを取って来させた。それをあけると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子をあわれに思い、「これはきっとヘブル人の子どもです。」と言った。そのとき、その子の姉がパロの娘に言った。「あなたに代わって、その子に乳を飲ませるため、私が行って、ヘブル女のうばを呼んでまいりましょうか。」パロの娘が「そうしておくれ。」と言ったので、おとめは行って、その子の母を呼んで来た。パロの娘は彼女に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私があなたの賃金を払いましょう。」それで、その女はその子を引き取って、乳を飲ませた。その子が大きくなったとき、女はその子をパロの娘のもとに連れて行った。その子は王女の息子になった。彼女はその子をモーセと名づけた。

（出エジプト記2章5～10節）

モーセはこのようにして不思議な神様のお導きによってエジプトの王女に子として育てられました。このまま行けば彼はこの世の富と権力を手にすることができたのです。しか

しそのようにはなりませんでした。彼は神様によって霊の目を開かれ、イスラエル人として信仰に基づく決断をすることができ、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選択し、その道を歩み続けることになったのです。その結果、モーセは大きな祝福を神様からいただき、神様のみこころを成し遂げる器として大いに用いられたのです。

## 信仰に基づく決断はイエス様が助けてくださる

私たちキリスト者が信仰に基づいて決断をくだそうとイエス様を仰ぐとき、イエス様はそれを喜んでくださり、みこころにかなう正しい決断ができるように助けてくださいます。

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。

（詩篇32篇8節）

しかし、イエス様はなぜ助けてくださるのでしょうか。それは十字架の上で流されたご自分の血によって罪を聖めてくださり、主のしもべとされた私たちを心から愛してくださっているからです。

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

（イザヤ書30章21節）

このようにイエス様はいつも主のしもべの耳元で助言をしてくださっているのです。主のしもべは絶えず霊の耳をすまして、イエス様のみ声を聞き漏らすことなく、イエス様から知恵と力をいただいて常に信仰に基づく正しい決断をすることができるように心から祈りたいと思います。

# 十　主イエスを信じる者の幸せ

自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

（ヨハネの黙示録22章14節）

今日は、聖書のこのみことばから、イエス様を信じる者の幸せについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。ここに「自分の着物」とありますが、これは私たちがからだにまとっている衣服ではありません。これは私たちの霊の着物のことです。この霊の着物は、私たちの曇った目にはたとえどんなに清潔に見えようとも、聖い神様からご覧になると、神様に背を向けて自分勝手に生きる罪というしみに染まって真っ黒に汚れているのです。この汚れは私たち人間がどのように努力して洗っても決して白くすることはできません。そして罪に染まった着物を着ているかぎり、私たちは天国の門を通って天の都にはい

り、豊かに実をつけているいのちの木から実を食べることはできないのです。

では天の都でいのちの木の実を食べられるにはどうしたらよいのでしょうか。それには自分の着ている、罪がしみついた着物を、イエス様が十字架の上で流された血潮で洗い聖めて白くしていただくほかないのです。そのために私たちがまずしなければならないことは、へりくだって自分の罪を神様の前に悔い改めることであります。そうすれば神様はその悔い改めを受け入れてくださって、御子イエス様の尊い血によって罪に汚れた着物を洗い聖めて、天の都に入れてくださり、いのちの木の実を食べる権利を与えてくださるのです。イエス様を信じるとは、この御子イエス様こそ尊い血潮を流して自分の罪を聖めてくださった救い主と信じ、受け入れることであります。ではこのイエス様を信じる者の幸せとは何かをこれから考えてみたいと思います。

## この世の幸せは肉的な幸せ

ふつう、私たちが幸せとか、幸福と思うのは、物事が自分の思いどおりに運んでいるとき、自分が満足しているときではないでしょうか。ですから、それと反対の状態、すなわち、自分の思いどおりにならないとき、不満を感じているときにはだれでも幸せとは思わ

ないし、また思うこともできません。けっきょく、この世の幸せ、幸福というのは「自分の肉にとって」という言葉がかならず前に付くのです。この「自分の肉にとって」というのがこの世の幸、不幸を計る基準になるのです。

## イエス様を信じる者の幸せ

けれども聖書は、この世の基準、人間の基準では計れない別の幸い、幸福、あるいはふしあわせ、不幸があると言っています。イエス様はこの世の幸せとは別の幸せについて次のようにおっしゃっています。

この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。義に飢え渇いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからで

す。義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。」

（マタイの福音書5章1～12節）

これは九つの幸福の教えとして有名ですが、イエス様が言われた幸せが、この世の幸せとはまったく違うということが直ぐにわかります。ここで注意したいのはイエス様はこれをだれに向かっておっしゃったかということであります。最初のところを注意して読みますと、イエス様は集まってきた群衆にではなく、弟子たちにおっしゃっていることがわかります。どうしてでしょうか。それはイエス様の言われた幸せは、イエス様を信じた結果、物事の価値基準がまったく変えられた者がはじめて知り得る幸せだからであります。ですからイエス様はこの世の人にではなく、ご自分を信じた者に向かって、神の子ども、神のしもべとされた者の幸せとはどういうものか、イエス様の弟子とされた者の幸せとは何かということを、具体的に九つの幸せという形に表わしておっしゃったのです。

## 霊的な幸せ

神様はイエス様を信じた者には神の子どもとされる特権をお与えになりました。

この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

（ヨハネの福音書1章12～13節）

神様の恵みによってイエス様を信じて神の子どもとされた者は、この世に属する者から、神様に属する者に生まれ変わったといえます。そうであれば価値基準も違ってくるのが当然です。たとえばイエス様を信じているために人々から謗られたり、敬遠されたり、非難されたり、迫害されたりするような事態が起こるとしても、神の子どもとされた者にとっては、それは不幸ではなく幸いなのであります。どうしてでしょうか。ペテロは、

もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。

（ペテロの手紙第一　4章14節）

と、そのわけを説明しています。イエス様を信じる者が神の子どもとして、恐れずにイエス様を証しする生き方をしたために世の人々から非難されれば、神の御霊が神の子どもの上に止まって、助け主として守ってくださるのですから幸せなのであります。すなわち神の子どもとされたイエス様を信じる者にとっての幸いとは、自分の肉が喜ぶこと、自分の肉の幸せではなく、信仰によって生まれ変わった霊が喜ぶことであり、試練に会うことにより、ますますイエス様との霊的な交わりが深められることの幸せであります。パウロはイエス様を信じる者の霊的な幸せについて、

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（コリント人への手紙第二　4章18節）

と言っていますが、イエス様を信じる者は、目に見えるこの世的、肉的な幸せが一時的なもの、空しいものであり、目には見えませんが霊的な幸せこそが永遠に続く、ほんとうの幸せであることをイエス様から教えていただけることを心から感謝したいと思います。

では、この幸せとはどのようなものでしょうか、もう少しくわしく聖書から見ていきた

いと思います。

## 神に選ばれている幸せ

イエス様を信じる者の霊的な幸せは、まず神様に選ばれたという幸せでありましょう。パウロはエペソの信者に送った手紙に、

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

（エペソ人への手紙1章3～5節）

と書いています。ここでたいへんに大切なことは、神様の選びは私たち人間がりっぱであるとか、善行をしたからということに関係なく、もっぱら神ご自身のご意思によるものであるということです。パウロは神様が選ばれた者がどのような者かということをコリント

の教会の信者への手紙に書いています。

兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。

（コリント人への手紙第一　1章26～28節）

そのように、愚かな、弱い、取るに足りない、無に等しいような者が、神様の目に止まり、イエス様によって神の子どもの対象に選ばれていたということは、何と言う幸せでありましょうか。

## 神に義とされている幸せ

次にイエス様を信じる者の大きな霊的幸せは、神様に義と認められているという幸せです。パウロはローマの信者への手紙で、

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである。」

（ローマ人への手紙4章5～8節）

前に申しましたように私たちは神様を敬い、その神様に仕えるどころか、その逆を行く生き方をしていた者です。しかしそのような者が自分の罪に気がついて悔い改め、イエス様を罪の贖い主と信じれば、神様はその信仰を喜んでくださり、ご自分に対する私たちの不義を赦し、義と認めてくださるのです。自分は何一つ善い行ないができなくても、このようにして神様ご自身が罪を認めないとおっしゃってくださり、罪が完全に赦されているということは、何と幸せなことではないでしょうか。

## 神に戒められる幸せ

三つ目にイエス様を信じる者の霊的な幸せには、神様に戒められるという幸せがあります。詩篇の作者は、

主よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに、戒められ、あなたのみおしえを教えられる、その人は。

（詩篇94篇12節）

と、神様に戒められる人の幸いを賛美しています。近頃、家庭や学校でさまざまな痛ましい事件が次々に起こっていますが、その大きな原因は、この世の中で愛するがゆえに叱るということが、親子の間でも、教師と生徒の間でも失われつつあるからではないかと思います。しかし、イエス様を信じた者は神様から戒めを受けます。それは神様が子どもとして愛してくださっている証拠です。神を恐れる人であったソロモン王は、彼の書いた箴言の中で、

わが子よ。主の懲らしめをないがしろにするな。その叱責をいとうな。父がかわいがる子をしかるように、主は愛する者をしかる。

（箴言3章11～12節）

と言っています。また、ヘブル人への手紙にはさらにくわしく、

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えら

れるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル人への手紙12章5～11節）

と説明しています。たしかに神様の鞭はイエス様を信じる者の肉に痛くはありますが、その懲らしめはご自分の聖さにあずからせるため、神の子どもの霊を成長させるための愛ゆえであることがわかれば、懲らしめも幸いと思うことができます。詩篇の作者は、

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇119篇71節）

と賛美していますが、これこそイエス様を信じて神の子どもとされた者だけが味わい知ることのできる幸せであります。

## 神とともにいることの幸せ

四っつ目にイエス様を信じる者の霊的な幸せには、神様、イエス様とともにいることができるという幸せがあります。イザヤ書には神様がどんなときでもイエス様を信じる者とともにいてくださると次のように仰せになっています。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ書41章10節）

御子イエス様の尊いいのちの代価を支払って罪から贖い出し、ご自分の子どもとしてくださった神様が、このように約束しておられるのです。ダビデは「神様がいつもともにい

てくださるのを見ているので、喜びに満たされた」と次のように言いました。

私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。主は、私が動かされないように、私の右におられるからである。それゆえ、私の心は楽しみ、私の舌は大いに喜んだ。さらに私の肉体も望みの中に安らう。あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。あなたは、私にいのちの道を知らせ、御顔を示して、私を喜びで満たしてくださる。

（使徒の働き2章25～28節）

イエス様を信じる者は罪のために閉ざされていた霊の目が開かれ、その目でイエス様がともにいてくださり、何が起こっても動揺することのないように守ってくださっているのを知ることができます。ですからその主に拠り頼んでさえいれば、どんなに嵐が吹き荒れても心はいつも平安であり、喜びで満たされるのです。これもまたイエス様を信じる者の幸せであります。

## 主イエスに信頼して生きる幸せ

五つ目にイエス様を信じる者の霊的な幸せは、この世の旅路をイエス様に信頼し、おゆ

だねして、イエス様から力をいただいて天の御国目指して日々歩むことができるという幸せであります。詩篇に、

なんと幸いなことでしょう。その力が、あなたにあり、その心の中にシオンへの大路のある人は。彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。初めの雨もまたそこを祝福でおおいます。彼らは、力から力へと進み、シオンにおいて、神の御前に現われます。

（詩篇84篇5～7節）

という箇所があります。イエス様を信じる者にとって、この世に生きる日々は決して楽しいものではなく、むしろ辛いこと、悲しいことが多いと言えましょう。なぜならこの世がサタンの支配する世界であり、神様に背を向けている世界であって、サタンはそのような世の中に生きるイエス様を信じる者を憎み、いろいろな手段を使って苦しめ、イエス様から引き離そうと試みるからです。しかしイエス様を信じる者の日々の歩みはイエス様が支えてくださいます。ダビデが、

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

（詩篇37篇23～24節）

と言っているように、イエス様を信じる者がイエス様に信頼していさえすれば、たとえ苦境に陥っても完全に挫折することはありません。たとえ涙の谷を過ぎるときも、イエス様によってその場所を喜びの、希望の泉の湧くところに変えることができます。嘆きの雨の場所もイエス様によって祝福におおわれます。そのようにしてイエス様に信頼し、イエス様から力をいただきながら天国への道を歩み続け、やがて天国で神様の御前に出ることができるのです。このようにイエス様を信じる者は、イエス様に信頼することによってこの世の旅路を希望をもって生きる幸せを与えられています。

これまでごいっしょに考えて来たことからわかりますように、ほんとうの幸せというのは、空しい肉的な幸せとはまったく違う、神様に祝福された霊的な幸せです。冒頭の聖書の箇所には、

自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

（ヨハネの黙示録22章14節）

とありましたが、さらに、同じヨハネの黙示録の二十一章三、四節には、

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

（ヨハネの黙示録21章3～4節）

とあります。そのように、私たちがイエス様を信じる信仰によって、これまで述べて来ましたような数々の幸せに加えて、涙も、死も、悲しみも、苦しみもない天の御国において、神様やイエス様からあふれるばかりの祝福を受ける者とされているということは、何という喜びおどるような霊的な幸せではないでしょうか。

■著者略歴■
重田　定義
1927年東京で生まれる
1950年慶応義塾大学医学専門部卒業
1967年慶応義塾大学助教授（医学部・衛生学公衆衛生学）
1974年東海大学教授（医学部・衛生学）
現在東海大学名誉教授　医学博士
著書
『私たちの国籍は天にあります』（やさしい聖書の福音メッセージ集）
『医者に治せない病気』
『仮の住まいと永遠の住まい』（わかりやすい福音メッセージⅡ）一粒社
『私たちはキリストに会った』（わかりやすい福音メッセージⅢ）一粒社

本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳聖書」から引用しています。

みことばは食べるもの　定価300円(本体286円＋税)
2000年4月20日　初版発行
著　者　重田定義
発行者　重田定義
〒167-0033　東京都杉並区清水2-8-12
印刷・製本　新生宣教団

定価 300円（本体 286円＋税）